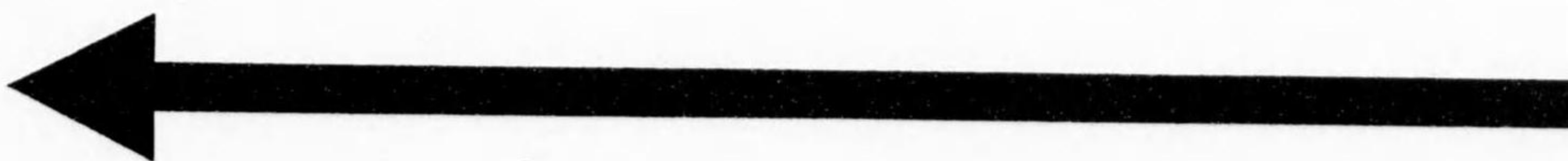


564  
79

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



竹袋布・竹淡・宗孟  
竹名大・竹方四・竹苦

# 方り作の筍

手技縣崎宮

著郎三甚島大

京 東  
房 書 社 久 文  
行 發



大島甚三郎著



蓋宗  
若竹  
淡竹  
四方竹  
布袋竹  
大名竹

筍の作り方

大正  
15. 10. 19  
内交

京東  
文久社書房  
行發

## はしがき

▽嘗て獨逸人が云つたそうである、「美味なること凡百の蔬菜中、筍の右に出するものなし」と、其味の優れてゐることを、只管賞揚して措かなかつたやうに、東洋の特産であり——我邦獨占の姿にある筍は、誰も彼もが齊しく、舌鼓をうつ所であつて茲にそれを云ふ丈けが、野暮であるかも知れぬ。——ために、内地に於ても、素張らしい人口の増加と、日進の文化とに伴つて、之れが需用は年一年と殖へる一方である。それと鑑詰になつて海外へ出る量も、亦決して鮮少ではない。

筍栽培者から見ると、斯く需用の増大する趨勢にあるのは、確かに一つの強味には相違なからう。——のみならず其仕事自身が頗る利益である。一反歩から數百圓の収入を擧げ、其大部分が収益であるものが敢て珍らしくないやうに——。だから農家の副業として最も適當してゐる。それは筍栽培の盛むな所、若くは近頃勃興し

て来た所を見ると、一目瞭然であつて、何よりも雄辯に此狀況を物語つてゐるのではないか。

▽孟宗畑にしても、淡竹畑にしても、……、筍の採收が主眼である以上、それは林業の繩張内ではなくて、純然たる蔬菜園藝でなければならぬ。蔬菜栽培の書物を繙くと、ちやんと孟宗筍の作り方が述べられてゐるやうに——。然し何れも唯だ單に二三頁を割かれてゐる位が關の山である。舶才の種類にかぶれて、申譯的に書かれたと云ふ譯でもなからうが——。現在では筍栽培も、竹林業の内へ混入せられてゐる場合が多い——。ために竹林栽培書の中に、より詳かに併せ述べられてゐるものが無いでもない、が、竹材の採收を本體として書かれたものであるから、痒い所に手のとどかない嫌のあるのは、又止むを得ない所であらう。萬更糞子扱ひと云ふ譯でもなからうが——。

儲かりの多い——益々進展せむとする筍の作り方としては、それでは何だか餘り

に物足りない感じがする。——計りではなくて、利用の廣い筍に對しても、亦餘りに不親切ではなからうか。斯う考へてきた私は僭越ながらも、奮つて筆を握つた譯である。決して其器ではないが——。

▽幸にも竹林先進地として、自他共に許してゐる京都府に生れた私は、過去十有餘年間福岡縣に——朝鮮に——宮崎縣に職を奉じて、専ら竹の仕事に携はつて来た。——其間に見聞した材料を基として、管内の講習講話は元より、招かれて大正十二年朝鮮全羅北道の竹林講話、翌十三年山口縣山林會主催夏期林業講習會の竹林講習、大正十五年島根縣山林會總會の竹林講演等に使つた原稿の内から、筍栽培の部のみを抜き取つて、宮崎日日新聞縦上に連載したものが則ち之れである。其内容は現在廣く作られてゐる孟宗畑、點々と栽培を見る淡竹畑、將來必ず興るべくして、未だ之れが經營を見てゐない布袋竹畑、苦竹畑、大名竹畑、四方竹畑等の栽培法に就て記したのである。——が就中孟宗畑に對しては、方めて詳細に

筆を執つた積りである。其他のものは、特に之れと違つた點のみを摘録するに止めた。それは略ぼ大同小異であるから——。

本書は勉めて平易に極めて通俗に、筆を執つた積りである。婦女子にでも判るやうに——。が私の見聞が狭いのと、文筆に拙いために、感興をひくことが少ないのと、實際に思つてゐたことを甘く書き現はし得なかつたことを、頗る遺憾に思つてゐる。若しも之れに依つて、筍の栽培に一寸でも益する所があつたとしたら、それこそ望外の光榮とする所である。

▽本書を手にならば、又参考となる點が少くはなからうと信ずる。既出版せられてゐる、次の書物を併せ讀んで下さるならば、又参考となる點が少くはなからうと信ずる。

○島村繼夫 共著 竹林改良法 送料九十一錢 (東京下戸塚五九四——三浦書店發行)

○大島甚三郎 共著 竹林造成法 送料八十二錢 (東京下戸塚五九四——三浦書店發行)

○安藤時雄 共著 竹林栽培の榮 送料二十錢 (宮崎市上野町——赤澤秀巧舎發行)

○大島甚三郎 共編 竹の歌を集めて 送料二十五錢 (宮崎市上野町——赤澤秀巧舎發行)

○大島甚三郎 著 朝鮮に於ける竹林栽培法 送料四圓 (宮崎市上野町——赤澤秀巧舎發行)

○大島甚三郎 著 儲かる竹の栽培法 送料一圓八十錢 (東京市赤坂區青山南町六丁目——文久社書房發行)

▽本書が此世に生れ出たのは、我邦竹林界の重鎮——恩師安藤林學士の下にあつて、親しく五星霜の間、懇篤な教示と——親切な指導とを受けた賜に外ならない。そして陰に陽に多數の先輩各位と、同窓の學兄神田京都府竹林主任、古畑福岡縣竹林主任、元安田熊本縣竹林主任、京都府乙訓郡橋本技手、京都府乙訓郡竹林同業組合工藤技師などの示教によつて、内容に一段の權威を添へた。尙ほ宮崎日日新聞社高田

編輯長の助力に負ふ所も尠なくない。

茲に謹むで其厚意に對し、深く感謝の意を表する次第である。

大正十五年五月三十日

日向の國に於て

著者識

孟宗・淡竹・布袋竹  
苦竹・四方竹・大名竹

筍の作り方目次

緒論……………(一)

二十四孝の筍掘……………(一)

熟慮斷行……………(三)

道に黄金が落ちてゐる……………(五)

當るも八卦當らぬも八卦……………(七)

云ふや易ふして行ひや難し……………(二二)

珍らしい青島の熱帯植物……………(二三)

強い野蠶Ⅱ弱い家蠶……………(二五)

憎まれ子世に蔓る……………(二七)

- 一反歩から米俵の十七俵 ..... (一八)
- 一萬圓貯金 ..... (二一)
- 人間萬事金の世の中 ..... (二四)
- 八年間に二十倍 ..... (二六)
- 大臣級を取る早道 ..... (二八)
- 取らねば取れぬ ..... (二九)
- 二本で六十五圓 ..... (三一)
- あけてくやしき玉手箱 ..... (三三)
- 追手に帆を ..... (三五)

一、孟宗畑 ..... (三七)

二、土地 ..... (三七)

- 石原筍 ..... (三七)
- 寒地に櫻桃 ..... (三八)
- 浮氣者は失敗する ..... (四〇)
- 初物食うと定命がのびる ..... (四二)
- 役者が一枚上手 ..... (四四)
- 色男金と力はなかりけり ..... (四六)
- 子供に養鶏させて ..... (四七)
- 更にべにや白粉をつけて ..... (四九)
- 一利あれば一害あり ..... (五一)
- 缺と奉公人とは使ひやう ..... (五三)
- 二、母竹 ..... (五四)
- 貧乏世帯の分家 ..... (五四)



- 疊と女戻とは新しい程よい……………(五六)
- 大男總身に智慧が廻り兼ね……………(五八)
- 庇髪蓋し笠なり帽子也……………(六〇)
- 雌竹から筍が生える……………(六二)
- 花嫁は臺所から……………(六四)
- 人は見掛によらぬもの……………(六五)
- 三、養 苗……………(六七)
- 無袖はふられぬ……………(六七)
- 濡手で粟のつかみ取り……………(六九)
- 蒔かぬ種子は生へぬ……………(七一)
- 四、掘 取……………(七二)
- 神ならぬ身の悲しさ……………(七三)

- 長持は枕にならぬ……………(七二)
- 急いでことを仕損ずる……………(七六)
- 過猶不及……………(七八)
- 入るを計つて出すを節す……………(七九)
- 惚られるにも祕傳あり……………(八一)
- 魚心あれば水心……………(八三)
- 五、植 付……………(八四)
- 一文借みの百損……………(八五)
- 整然と且雜然と竹植る……………(八六)
- 吉日選んで結婚式……………(八八)
- 大は小をかなへる……………(九〇)
- 子孫の爲に美田を買はず……………(九一)

田植の要領で ..... (九三)

忠ならむと欲すれば孝ならず ..... (九五)

他人の土地へ筍が生へる ..... (九六)

若い男女の戀愛のやうに ..... (九八)

轉ばぬ先の杖 ..... (一〇〇)

眼暈の人には先づ水を ..... (一〇一)

六、探 植 ..... (一〇三)

禍を轉じて福となす ..... (一〇三)

一利一害 ..... (一〇五)

七、誘 引 ..... (一〇七)

蟻の甘きに集まる ..... (一〇七)

別嬪さんに若い男が ..... (一〇九)

罰せられぬ泥棒様 ..... (一一〇)

八、間作 ..... (一一二)

胡瓜の蔓を摘心した様に ..... (一一三)

九、除草 ..... (一一四)

色氣が減つて慾氣が殖え ..... (一一四)

一〇、施肥 ..... (一一六)

座して食へば山をも空し ..... (一一六)

借金には利子がつく ..... (一一七)

腹がへつては戦が出来ぬ ..... (一一九)

財布の紐の締加減 ..... (一二一)

隱徳あれば陽報あり ..... (一二三)

千里の馬 ..... (一二五)

布施ない經には袈裟落す……………(一三六)

佛造つて靈を入れぬ……………(一三八)

柿の木に牛を繋ぐと豊産……………(一三〇)

犬もあるけば棒にあたる……………(一三二)

寝て暮す吞氣時代……………(一三四)

權兵衛が種子蒔きや鳥がほでくる……………(一三六)

近視眼……………(一三七)

一一、敷草……………(一三九)

林學士農學士……………(一三九)

姑嫁ふる嫁下女をふる……………(一四一)

天女が交つたやうに……………(一四三)

天寶錢の寢言……………(一四四)

三度炊く飯さへ堅し柔かし……………(一四六)

運用の才……………(一四八)

一二、土置……………(一五〇)

都會から別莊へ……………(一五〇)

身を泰山の安きに置く……………(一五二)

色が白けりや七難隠す……………(一五三)

棚おろし……………(一五五)

骨折損のくたぶれ儲け……………(一五七)

一三、根埋……………(一五九)

落つれば同じ谷川の水……………(一五九)

尊い寺は門から知れる……………(一六〇)

椽の下の筈……………(一六三)

一四、中耕……………(一六四)

窮すれば自ら通ず……………(一六四)

一五、親竹……………(一六六)

一筭を客に掘らせて亭主ぶり……………(一六六)

一得一失……………(一六八)

老人の子は影薄し……………(一七〇)

天道人を殺さず……………(一七三)

貧乏人の子澤山……………(一七五)

若返り……………(一七五)

四十までは子をはらむ……………(一七七)

老いたるを父とせよ……………(一七九)

花多ければ實少なし……………(一八〇)

杓子定規……………(一八三)

出生届……………(一八四)

一六、梢止……………(一八六)

憎うては叩かぬ……………(一八六)

抗議のお蔭……………(一八八)

角をためて牛を殺す……………(一九〇)

身體髪膚敢不毀傷是孝之始也……………(一九二)

瓜の蔓には茄子はならぬ……………(一九三)

心臓や肺臓のやうに……………(一九五)

一七、保護……………(一九七)

雪見の酒……………(一九七)

子宮病……………(一九九)

散財すきの道樂息子 ..... (1100)

猫に小判 ..... (1101)

一八、採筭 ..... (1102)

早婚早生の兒 ..... (1102)

貧すりや鈍する ..... (1103)

弘法は筆を選ばず ..... (1103)

壘と女房の要領で ..... (1110)

手を握つて病名を判定 ..... (1111)

傘屋の小僧 ..... (1113)

廢物利用 ..... (1115)

たけのこの頭に石をのせ ..... (1117)

萬年判任官 ..... (1119)

一九、副産 ..... (1121)

都市の附近で花竹を ..... (1121)

朱に交はれば赤くなる ..... (1123)

二兎を追ふ者は一兎も得ず ..... (1125)

新陳代謝 ..... (1126)

すたり物なし ..... (1128)

肥たタケノコあちこちに ..... (1130)

二〇、更新 ..... (1131)

古家の修繕 ..... (1131)

二一、改良 ..... (1134)

身から出た錆 ..... (1134)

一寸の虫にも五分の魂 ..... (1135)

二、淡竹畑——布袋竹畑——苦竹畑——大名竹畑——

四方竹畑……………(二三七)

大同小異……………(二三七)

實る程頭を下げる稻穂哉……………(二三九)

粹に變りて都鳥……………(二四一)

貞婦に美人稀なり……………(二四三)

三、結論……………(二四五)

釋迦に説法……………(二四五)

千の倉より子は寶……………(二四七)

農村の振興……………(二四八)

生徒料理のタケノコ飯……………(二五〇)

百日の説法屁一つ……………(二五二)

氏無うして玉の輿……………(二五四)

孟宗・淡竹・布袋竹  
苦竹・四方竹・大名竹

筍の作り方 目次 (終)

孟宗・淡竹・布袋竹  
苦竹・四方竹・大名竹

# 筍の作り方

# 實驗筍栽培法秘訣

大島甚三郎著



緒論

二十四年の筍掘

たけのこ  
筍さん！  
たけのこ  
筍さん！

桜の花が見たいのか？

蝶々の飛ぶのが見たいのか？

地面を破つてムクくと



顔突き出してのぞいてる。

花笑ひ―鳥唄ふ陽春の候に、出て来る太い能く肥た筍が云はずと知れた孟宗筍である。總ての蔬菜類は、やつと冬の眠りから揺り起された計りで、青物店にもまだ餘り現はれてゐない、時分に此筍が出るのと、其筍が至つてやわらかであり、味が素敵に甘いので、一般家庭の食膳を賑はしてゐる。殊に都人士からは珍重せられ、歓迎せられるものである。

孟宗筍に次で、破竹の勢ひで發生するのが淡竹の筍である。淡竹の筍は孟宗筍に較べて、稍其味は劣るけれども、最早孟宗筍の無い時期であるから、都市などでは相當に需用せられるものである。淡竹と時を同じふして發筍するものに、布袋竹と云ふのがある、其筍は餘り大きくはないが其味のよいことは實に天下一品、これの右に出るものは無いと迄云はれてゐる。

淡竹、布袋竹の次ぎに、所謂梅雨の前後に生へる筍が苦竹である。此の筍は少し苦味があるけれども、萬更棄てたものではない。六月頃に筍の生へる大名竹がある。昔は大名でなくては口にするこの出来なかつたと云ふ位に、其味は非常に良好である。殆ど四季に發生すると云つてもよい、四方竹と云ふのがあり、二十四孝の筍掘りではないが、寒中に盛んに筍の生へる、寒竹といふのがある筍の味は何れも中々結構なものである。

### 熟慮斷行

竹材にして伐採するよりも、筍で採收した方が利益であれば、筍で取つた方が結局得策である。反對に筍で採收するよりも、竹材に仕立て伐採した方が有利であれば、竹材にして採收するのが確に利益に違いない。そこで竹林經營にも其目的によつて、自ら二つに岐れるものである。其一つは竹材の採收を主眼とするものであつて、是を林業の内の竹林業と謂ひ、他の一つは、所謂筍の採收が眼目であつて、彼の農業の

中の蔬菜栽培に属するものである。例へば孟宗畑、淡竹畑、杯と云ふのが即ち之である。筍の採收が主目的であるから。

多くの場合都會附近では、竹材で賣るよりも筍で賣つた方が、遙に有利な場合が多い。それは東京附近の目黒、京都附近の葛野乙訓郡、下關附近其他の都市附近に於て筍の栽培の隆盛なことが、何より雄辯に此事實を物語つてゐるのではなからうか？併し今日のやうに、交通機關が發達して來ると、相當需用地と相隔つてゐても、尙且つ筍の採收した方が、利益の多い場合がある。——宮崎縣、鹿兒島縣の筍が大分に別府に門司に八幡に、福岡、小倉に流れ込み、京都府産の筍が、大阪名古屋は勿論だが遠く東京に迄搬出せられるやうなのを見ても、瞭に其の一斑は窺へるであらう。それと筍の罐詰業の發達は、都市を離れた田舎、交通不便な山村にまでも、自然に之が栽培を促して止まない趨勢である。

金儲けの秘訣は馬車馬的に働くといふこと計りではない。稼ぐに追ひ付く貧乏神が居るから……。熟慮斷行、それこそ秘訣の大部分は占めてゐる素因でなければならぬ。竹林經營にしても、亦竹材採收を利とするか、果た筍採收を利とするかを熟慮してそして斷行し利益な方向に猛進するのが蓋し賢者の採るべき途ではなからうか。

道に黄金が落ちてゐる

筍と云へば——唯しも直ぐに、孟宗筍を聯想するであらう。それ位に此筍の名聲は高く、需用は廣大である。従つて今から約二百年前に、始めて琉球から九州に入り、それから本邦各地に傳播した孟宗竹は、今や其栽培が盛であり、技術も亦相當に進歩してゐる。斯う云ふ過去の歴史を玩味した時に、必ずしも孟宗畑の栽培は、不利なりとは斷ずることが出來ないで、此作業は極めて安全であり、有利であると云はざるを得ない。

近頃ポツ／＼と現はれて來かけたのが、云ふまでもなく、淡竹畑の栽培である。特に

京都附近では、年を重ねて益々擴張するの趨勢に向つてゐる。孟宗筍に亞いで發生する淡竹の筍は、都市附近に於て之を培養し、確に有利な事業の一つであると云ふに憚らぬ。明治四十年前後に亘つて、淡竹林は悉く開化枯稿し、それ以來頓に其面積を減少して止り筍の産出が少く、一方此の筍の需用が殖えてきたから——淡竹の代りに、淡竹に斑紋が出来て、竹材が高價に賣れる紋竹（丹波斑竹）を植て、筍畑としてゐるものが京都附近にある。——筍は淡竹と同様であるが、其の親竹が高價に賣れるだけ得である。

宮崎、鹿児島、熊本縣などでは、到る所の山野に布袋竹が繁茂し、淡竹と時を同じふして筍を發生してゐる。現今では、竹材で採收するよりも、寧ろ筍で取つた方が金高が大きい、此結果採筍を主としてゐるものが多いやうである。他の地方では此竹は全く見當らない位であるが、筍の味が天下一品である所から見ると、布袋竹畑も亦有望ではなからうか。

苦竹の止まり筍だけでは、充分に都市の需用を充たし得ない所若しくはその價格の相當に高い所では、苦竹畑も萬更棄てたものではなからう。大名竹畑、四方竹畑等時ならぬ時期に、珍味な筍を食膳に上するのであるから、之を栽培すれば自家用としても將た商品としても、趣味があり利益な業といはねばならぬ。

唯やらの言つたやうに、道に黄金は落てゐる。吾々は之を拾はなければならぬと——實にそうである。金儲けの仕事は數多く轉んでゐる。吾々はその仕事に手をつけなければ駄目である。孟宗畑に、淡竹畑に……に——。

當るも八卦當らぬも八卦

農商務統計から最近の筍生産量を書き抜いて見ると次表の如くである。びつしやり合つてゐるか、それとも違つてゐるかは知れぬ。當るも八卦であり、當らぬも八卦と云ふことがあるから——。

大正十二年筍生産額調査表

(大正十二年農商  
務省統計ニヨル)

府縣名	面積	收量	價格	一反步收穫高
岩手	五〇、六 <sup>町</sup>	一一、三六七	三、七八〇 <sup>圓</sup>	二二 <sup>メ</sup>
宮城	一五九、八	三六、五四五	一五、八〇〇	二四
秋田	二一、七	五、五七五	二、八四四	二六
山形	四三、二	一三、〇七〇	八、四五二	三〇
福島	二七四、六	一一八、九八三	四一、七六三	四三
茨城	三五九、三	一二七、二九六	四五、〇五八	三五
栃木	一七一、六	九八、六二九	四八、一三七	五七
群馬	二二、六	二二、二九八	一〇、〇八〇	九九
埼玉	五三、七	四三、一四二	二五、九九〇	八〇

千葉	〇、九	一、四八〇	七四五	一六四
東京	三〇一、五	七二七、六三三	四二九、三六二	二四二
神奈川	一七三、〇	二三八、〇九〇	一二二、八九一	一三七
新潟	一九七、七	一〇九、四六八	四〇、六七七	五五
富山	八四、五	七六、六二五	三一、八九五	九一
石川	二一三、二	一五七、五五八	八八、一三二	七四
福井	一三一、八	一二九、〇五三	四三、一五五	九八
山梨	一四、三	一二、〇七二	五、六六七	八四
長野	一三三、九	五六、七八〇	二一、八五一	四二
岐阜	三五七、二	一七〇、三〇三	七二、七六三	四八
静岡	四一九、六	二七六、一四二	一一〇、五七六	六六
愛知	一五一、〇	一七七、一三二	八五、四四七	一一七

三重	二二九、二	二四九、九七一	一一一、二六一	一〇九
滋賀	二〇五、一	二二五、〇六二	一〇二、三六二	一一〇
京都	一、四三四、二	二、五五七、七二〇	一、六二七、九八七	一七八
大阪	三八四、八	九二六、二七三	四七四、三四八	二四一
兵庫	三四八、八	三三八、八九二	一五五、五九七	九七
奈良	一五三、八	一四八、五四五	六七、四五六	九七
和歌山	二〇四、四	二四四、〇三〇	七七、二七五	一一九
鳥取	二〇一、三	一四二、二八〇	四三、〇六八	七一
島根	七四二、七	六一四、四九一	一四七、七四〇	八三
岡山	四五三、一	四一一、五九七	一七六、〇九四	九一
廣島	六〇六、六	四二二、八五一	一二六、〇五七	七〇
山口	一、二九三、九	七六三、六二九	二二四、五一九	五九

德島	六六一、八	五三三、七五九	一九八、〇八七	八一
香川	二二一、三	二四二、五七七	一〇六、九五八	一一五
愛媛	七二〇、二	五六九、三七五	二〇二、二三八	七九
高知	五一七、〇	二九六、三五八	九九、一〇二	五七
福岡	一、五一〇、七	一、一七九、三四八	三八一、一四四	七八
佐賀	一二三、七	九二、六五四	三一、三一〇	七五
長崎	二三六、八	一一三、六六〇	五二、九五九	四八
熊本	一、三三四、三	一、〇一五、四三二	三〇八、〇一二	七六
大分	八三九、三	三八一、九二四	一二六、六六六	四六
宮崎	三〇二、一	三七五、一五七	一二六、七九九	二四
鹿児島	四六一、九	二一七、〇七一	五九、三〇八	四七
合計	一六、五〇二、七	一四、六七一、九〇七	六、二八一、四一三	八九

云ふや易ふして行ひや難し

農商務省統計から我邦における、筍の生産額を摘記して見ると、

年次	面積	收量
大正十一年	一六、〇七二町	一四、七八五、七五六貫
同十二年	一六、五〇二、	一四、六七一、九〇七、

右の如く年々の採筍量は、略ぼ千四五百萬貫と云ふ見當である。千四五百萬貫の素敵に大きく聞へぬでもないが、内地の人口六千萬人に割當て、見ると、一人平均二百四十匁にしかならぬので、眞實に開いた口が閉じられぬ。——二百四十匁の筍、皮を剥ぎ、根部を棄て、不良部を切除せば、實際に吾人の口に入る分量は極めて僅少で、一回の副食物にさへ尙且つ足らぬ位であらう。斯う算盤上から考へて見ると其聲や頗る大にして、其の實や頗る僅少なものであるといはざるを得ない。

一箇年一人當り二百匁餘りの筍では、決して充分であり、満足な量だとはいへない少くとも、一人當り一貫目位はあつた方がよい、——現在の四倍や五倍の産額があつても、決して需用が無いといふことも無ければ、又生産過剰に陥るなどの心配もない。かう考へて來ると、筍の生産を今日以上に増殖しても、それが賣れなかつたり、俄に價格が暴落するなどの心配はなからう。いふや易ふして行ひや難しと、筍の生産額を今日の倍額以上に殖すことすら、並大抵の業ではないから。——

前記の數字は重に孟宗筍ではあるが、其他の筍が混じつてゐる、淡竹筍、苦竹筍……など、夫々異なつた時期に、發生するのだから、必ずや其時期々々に、争つて消費せられるものである。

珍らしい青島の熱帯植物

丁度關東大震災の時であつた。私は朝鮮全羅北道の各郡を廻つて竹林の講話をやり

一日の任務を終る毎に、招かれて料亭に上つても、辭して旅館へ引上げて、キツト孟宗筍の料理が食膳に上つてゐた。或日隨行の人や——通譯の者に、其の理由を尋ねて見ると、異口同音に曰く、朝鮮で筍料理を出すのは、大層お客を優遇してゐるのだと、私はそれが果して信であるか偽であるかは問題外としても、略本州に匹敵するだけの地積を有する朝鮮に於て、最近の統計に現はれた孟宗竹林の面積を見れば、僅かに一町七反三畝歩ではないか。——二町歩に足らぬ面積から生産する筍の量は、實に微々たるもので、論ずるに足らない位に少量である。斯様に少い朝鮮では、内地人が想像し得ない位に之を珍重し——鄭重にするのは、別に不思議なことではなからう。夫は皇祖發祥の地——日向の國に始めて入つて來た、總ての人が青島の熱帯植物を見、幸島の群猿を見、都井岬の一大蘇鐵林を見て、驚き且珍奇がると好一對ではなからうか。

見せぬ物は見たい、無いものは珍らしい、これは蓋し人情の常である。——斯う云ふ意味からかどうかは、保證の限りではないが、朝鮮へ流れ出る筍の罐詰は實に素晴らしい勢ひである。獨り朝鮮計りではなく、竹の無い歐米各國へ輸出する罐詰の量は決して僅少とは云へぬであらう。

今日筍の栽培をやつてゐる國は、世界中獨り我邦のみだと云つても、強ち間違ひだとは云へない狀況である。だから日本産筍で國內の需用を充たすのは勿論、盛んに海外列國へ出る筍も亦、自ら作り出すだけの抱負と、元氣とがなければならぬ。嘗て或る外國人が、凡百の蔬菜中筍の右に出る美味なものは斷じてない、と推賞し讚辭を呈したことがある。斯様な言葉を聞けば尙更其感を深ふせざるを得ぬ。

強い野蠶——弱い家蠶

頑強であつて野生時代の植物も一朝人間の手に渡つて、改良に改良所謂人為陶汰の恩典に浴して、其名も粹に作物と唱へられることになる。と風、雨、寒、暑、病、虫

……等に、抵抗する力が微弱となり、害を蒙る事が大きくなる。それは恰も、天然自然の懷に抱かれて、櫛風沐雨をこととせず、活潑に生存してゐた野蠶も、一度家蠶に戸籍替して、暖かき屋内に夜の目も寝ずに、養はれることにもなれば、陽氣の激變一つでさへ、バタ／＼と斃れることが敢て珍らしくないやうに――。

人為淘汰によつて、總ての作物は、野生時代のそれに較べると、確かに片輪者にせられてゐる。そして著しく虚弱になつてゐることは事實である。だからこれが栽培に當つては、寸時も保護――手入を怠つてはならぬ。若しもそれを放任したとしたり、キツト収量が減じ収入が減るのは明瞭過ぎる程明瞭なことである。

所が竹では今日迄多く天然自然に放任せられて、人為の淘汰を受けてゐることが極めて鮮くない。或は野生其まゝだと云ふのが穩當かも知れぬ。それで野に生へてゐる草や、山に立つてゐる木と何等異らない位に、丈夫であり強壯であり、頑健である。別に之れと云ふ保護や手入などをせないので、今尙衰弱もせず滅亡もせず、否盛んに繁

殖し蔓延してゐるのを見ても、其の一斑は能く窺へるであらう。此點が一般農作物と大層違ふ所である。

竹は草木と同様放任して置いてさへ、相當な収入が擧がるものである。若しもそれに手を入れて栽培するとなれば、其収入は激増し、收益の非常に殖へるのは火を見るよりもあきらかである、其處は筍作の得點ではなからうか。

### 憎まれ子世に蔓る

竹は其性質極めて頑強で、憎まれ子世に蔓る、と憎まれる田畑の雜草のやうに竹はよし其處が瘦地であらうが、石原であらうが傾斜地であらうが、そんなことは一向頓着せず、自力によつてドシ／＼、上へでも下へでも、横へでも縦へでも、持つてゐる丈けのエネルギーを傾注して、四方八方に蔓るものである。それだけ農作物を栽培しても收穫の少い所、生育の思はしくない所、土地代の安い所、租税諸負擔の軽い所な



どでも筍の栽培は充分に出来る。唯單に栽培が出来るといふ計りではなくて、他の作物を作るよりも、確かに利益の大きい場合が珍らしくない。實はそんな下等な土地で充分に培養して作った方が、却つて品質の優良な筍が出来るものである。之が劣等地の利用法であり、そして土地の收利増進策であつて、其の趣きや稍異なるにしても禍を轉じて福となす、とも云へるではなからうか。

それは竹林先進地として、自他共に許してゐる京都附近に、足一度踏入るゝならば此の状況は一目瞭然のことであらう。——赤松の辛うじて生育し得るやうな、丘陵か又は山腹で筍を栽培し、品質の優良なものを生産して、非常な収益を擧げてゐる。此點も亦筍作の利益な所であり、更に一面から見ると、國家經濟上頗る有利なことであると云はねばならぬ。

### 一反歩から米俵の十七俵

打渡す家居の數もわかぬ迄、茂りにけりな里の竹むら。

と誰やらが歌つたやうに、京都附近は竹の里である。まるで竹の海である。大正十三年京都で開かれた、全國竹林主任會議に參列した序に私は、就中盛んな向日附近を見るべく、乙訓郡役所に同窓——橋本技手を訪ふた。

——近頃一反歩の孟宗畑から、五百圓内外の收入を擧げてゐる者は、敢て珍とするに足らないが然しそれは、所謂優良畑に屬するものであつて、普通の畑だとは云へない。——極普通な孟宗畑では先づこんなものだと云つて、氏が詳細に調べ上げた、孟宗畑の收支計算表を見せて呉れた。それを一寸記して見やう。

#### 孟宗畑一反歩收支計算

(大正十三年六月調)

收入 二百九十六圓五十錢

(内譯筍三百三十五貫——二百九十三圓五十錢、竹材三十本——三圓)

支出 百四十三圓

(内譯肥料四十圓、刈草五十圓、人夫四十三圓、雜費十圓)

差引 百五十三圓五十錢、益金

一反歩の收入二百九十六圓五十錢と云へば、一石四十圓の米七石四斗に相當するの  
で、四斗俵に換算すると驚く勿れ十七俵餘りになるのではないか。そうすると、反當  
り二石の米を收穫し得る、水田三反七畝歩を栽培するのと、孟宗畑一反歩を栽培する  
のと、其收入に於て同じことになる。其益金百五十餘圓と云へば前の筆法で算出する  
と、米三石八斗に匹敵する計畫になる、——假に水田一反歩の小作料を一石とする  
孟宗畑一反歩の益金は、丁度三反八畝歩の水田を小作させてゐるのと同様である。否  
孟宗の方は税金や負擔金が少いだけ、水田よりも遙かに採算上有利ではなからうか。  
孟宗畑一反歩を造り上げれば、水田五反歩近くを手に入れたのと同じやうな收入に  
なる。現に京都附近で、一反歩の孟宗畑が二千圓内外してゐるのは、收利の點から見  
て決して怪しむには足らない。

### 一萬圓の貯金

四國から宮崎市に移住して來た山本善七氏が、到着後第一に着眼したのが孟宗畑で  
ある。大正九年の春母竹を植付けて、遂に孟宗畑を造り上げた。今其の收入を聞いて  
見ると一反歩につき次のやうである。

▲大正九年 春期植付 ▲大年十年 なし ▲大正十一年 五十圓 ▲大正十二年 二百  
四十八圓五十錢 ▲大正十三年 三百五十四圓四十錢

——相當に經費もかけてはゐるが、收入金も亦大きいものではないか。今此收入を  
土臺として、將來の收入を豫想して見ると、面積三反歩の孟宗畑を造成さへすれば、  
植付け後十五年目に、塵も積れば山となり、大海も一滴の水の集まりとか、丁度一萬  
圓の貯金が出来る勘定になる。——僅かに一萬圓の金ではあるが、世智辛い時節柄、  
何かのたしに成らぬこともなからう。當て事と——越中禪とは向ふから外れ易いも

のではあるが、山本氏の如き熱心を以てすれば決して外れないから、先づ参考のために、其収入の概要を記して置かう。

孟宗畑三反歩造成收支概算

年次	支出	収入	差引	損益累計
一年目	一八〇	(一)	一八〇	(一)一八〇
二年目	一二〇	一二〇	〇	(一)一九八
三年目	一五〇	一五〇	〇	(一)二一八
四年目	一八〇	四八〇	三〇〇	六〇
五年目	二四〇	六〇〇	三六〇	四二六
六年目	三〇〇	七五〇	四五〇	九一九
七年目	三六〇	九〇〇	五四〇	一、五五一

八年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	二、三〇六
九年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	三、一三七
十年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	四、〇三〇
十一年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	五、〇五五
十二年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	六、一六〇
十三年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	七、三七七
十四年目	四四〇	一、〇五〇	六〇〇	八、七一五
十五年目	四五〇	一、〇五〇	六〇〇	一〇、一八六

(イ) (一) は損のしるし

(ロ) 植付後三年目迄は農作物を間作する

(ハ) 利息は年一割とす

(ニ) 植付後十五年目には元利合計壹萬百八十六圓となる

人間萬事金の世の中

明治四十四年度から全国に率先して、竹林専任技術者を置いた所は、知る人ぞ知る福岡縣であつた。それだけに力瘤を入てゐる、同縣遠賀郡上津役村に、竹森次八郎氏といふ孟宗畑の經營に熱心な人がある。奉職時代に私も一二度見たことがある、その人が大正元年に植付た孟宗畑の收支計算は、概要次の如くであると、同窓福岡縣古畑竹林主任から知らせて來た。

孟宗畑一反歩收支計算

年次	収入	支出	収益
大正十年	一六八、八七	五九、〇七	一〇九、八〇
同 十一年	一六三、九六	六七、〇三	九六、九三
同 十二年	二八九、四一	八七、六九	二〇一、七二

更に大正十二年における收支の内譯を記し見やう

- ▲収入、筍 四百三十三貫六百匁——二百八十九圓四十一錢
- ▲支出、下肥三十一圓五十錢——藁二圓三十四錢——人夫五十三圓八十五錢——計八十七圓六十九錢
- ▲差引、二百一圓七十二錢 収益

此畑は縣の委託試驗地になつてゐるので、萬々此數字に間違があらう筈はなく、私も正確なものだと保険を付けて置く。

現在四反歩に近い孟宗畑を所有してゐる氏は、年々此處から八百圓に近い収入を擧げて、四五百圓の金を儲けつゝある譯である。

道いそぎ心矢はせとはやはやれども、  
錢がなきゆるゑ渡られぬ浪。

と一休禪師の歌にある、——如くに、人間萬事金の世の中ではないか、その金を儲

ける仕事としては、孟宗畑の栽培など最も適當な事業ではなからうか。

### 八年間に二十倍

宮崎縣兒湯郡高鍋町の近くに、京都府から移住して來た仁張市松氏と云ふ老人がある。其人が自ら新植した孟宗畑からも、手を下して改良した孟宗畑からも、反當り何れも二百圓内外の收入を擧げてゐる。其土地は目もとどかぬ位に廣い、廣い平原地の一部であるが、廣い割合に農家戸數が極めて少い所から、折角開墾せられてゐる畑地も、多少荒廢に傾きかけたものが點々と目に留まる。そう云ふ狀況からであらう、高鍋町から僅か一里足らずであり、高鍋驛から二里とは離れてゐない、地味も可なり好い、此附近の畑が一反歩僅々四五十圓の價に過ぎない、此處に孟宗竹をさへ植付けて置けば、桃栗三年柿八年と、數年の内には、一反歩の面積から二百圓内外の筈代が取れることになる。そうなるともう占めたものである——假に反當の收益が百圓だと

するも土地代に對する利廻りは將に二十割であつて、孟宗畑成金となることは請合である。

年一割の利率で計算すると、百圓の利息を生みだす爲めには、千圓の元金を必要とするのではないか、此筆法から云ふと、僅々一反歩の價格五十圓であつたものが、孟宗畑にしたればこそ、一躍して千圓の價値に向上したのと同様である。反當り百圓の收益があるものとすれば——。

孟宗竹を植付けてから遅くも八年を經過すれば、一人前の孟宗畑になるものであるから、五十圓の畑地が千圓の孟宗畑になつたとすると、其土地は實に二十培の價格騰貴を來した譯ではないか。斯様な實例は到る所に轉がつてゐる。土地の價格向上策から見ても、孟宗畑の造成は實に有利である。こんな甘い仕事は、他に數多くあるものではない。

大臣級を取る早道

能く質問するのが此人の癖である。或日某縣技師が視察に来た。所が孟宗畑に案内するや、直例の質問の矢を放つた。此處で完全な孟宗畑が出来てしやうか。——すると地味を熟視した技師は、さも堂々たる句調で困難だらうと答へた。果して困難だつたらうか？。夫れ以來自分の力によつて——自力によつて、完全な孟宗畑に仕立上げて見やう、と堅い々々決心をした。其の人が本州に坪井竹林翁があつたやうに、九州の竹林翁と——自他共に許してゐる、南部忠文氏其人である。齡將に七十を超へた氏の住所は、福岡縣三池郡二川村である。

現に二町歩の孟宗畑を經營し、そして其處から。六千四百圓の収入と二千六百八十圓の収益を擧げてゐる。——反當りの平均収入は三百餘圓で其儲かりは百三十四圓に當る勘定である。技師から見棄てられた其劣等の土地で——。噫偉大なる哉、自然を

制する翁の力、六千四百圓の収入と云へば、一寸良二千石——知事級を飛超へた金額で、大臣の俸給にも近い位である。して見ると、大臣級に漕ぎつける近道は、獨り孟宗畑の經營に限ると斷言して見たい。——何時首になるか判り得ない、云はば風前の燈次にもさも似た心細い、俸給生活などを夢みないで、土と親しむ、自然の孟宗畑を友として、大臣級を天から授けられつゝ、悠々として世を渡るのが、どれだけ賢い人だか知れないと思ふ。

取らねば取れぬ

東京府阿部技師の通信によると大正十四年東京における筍一貫目の價格は次の如くである。

- ▲目黒附近地元相場 高さ時六圓安き時七十錢
- ▲神田市場相場 高さ時八圓安き時一圓五十錢

氏が嘗て獨特の面白い栽培法を講じてゐる。東京目黒附近で、孟宗畑植付後における面積一反歩の筍の収量を調査して、次の如くに、大日本山林會報へ發表せられてゐる。

▲一年目、ナシ ▲二年目、三十貫目 ▲三年目、五十貫目 ▲四年目 百五十貫目 ▲五年目、二百貫目 ▲六年目、三百貫目 ▲七年目、四百貫目——五百五十貫目 ▲八年目、至十一年目、前同 ▲十二三年目、五百五十貫目——六百五十貫目。假に一反歩の孟宗畑から筍五百貫目を收穫し、一貫目平均一圓で賣却したとする、其價格は實に五百圓ではないか。——半分儲かつたとしても、二百五十圓と云ふ金額になるので、誠に孟宗畑大明神と云はざるを得ない。

一反歩の孟宗畑から三百圓内外の收入を擧げてゐる所、一反歩の孟宗畑から百圓内外の収益を擧げてゐる所は、獨り茲に記き上げた所の獨占ではなくて、全國到る所に其例は乏しくない。少しく之が栽培にさへ熱心な所であれば。植付後七八年目になる

か、ならないかの孟宗畑で、面積一反歩から二百圓内外の收入を擧げて居るのを、天恵に浴することの少い、朝鮮全羅南道榮山浦と、全羅北道群山附近で見たことがある。すこし其氣でさへかゝれば、天恵地利の多い内地で、反當り四五百圓がたの筍が取れるのは當然である。

遠慮せず取らねば取れぬ孟宗畑、  
取れぬは己が取らぬなりけり。

二本で六十五圓

近頃京都附近——其他の地方でやつて居る、淡竹畑の經營も、可なり儲かりの大きい仕事のやうである。何でも當業者の話の聞くと一反歩の收穫量は二百貫目内外の筍で、——價格が百六十圓内外のことである。百六十圓の收入があつたとしたら百圓は確かに収益であるから、そう見棄てた事業でもなささうである。

京都附近でやつてゐる紋竹畑、之は有名な丹波斑竹であるから、筍は淡竹畑と同様に取れ、同様に賣れ行くのであるが親竹に立派な斑紋が附着するから、其値段が非常に高い、それだけは淡竹畑よりも利益である。序にいふて置くが、大正十三年京都で開かれた全國竹材竹製品共進會で二本の丹波斑竹が六十五圓で賣約濟みとなつてゐた。——位に優等材になると素張らしく高いものである。

私がこれから説かむとするやうな、布袋竹畑の經營をやつてゐる人が、未だ不幸にして見たことがない。宮崎縣模範竹林に造り掛けてはあつたが、日尙淺い爲めに茲に發表するだけの資料もない。——従つて其收支の概要を示し得ないのを遺憾とする。然し私は自然に放任された、竹材を取り、筍を採る、布袋竹林を九州到る所に散見してゐる。取る一方の布袋竹林でさへ、反當り十圓内外の筍代を獲得してゐる人は、枚舉に違がない位に多い。保護培養を講ぜない放任竹林でさへ——。味のよい布袋竹の筍は、宮崎市場で七八本を束ねて、其價は實に十錢である。生筍の販賣は元より

味付罐詰として將來有望な、此筍を生産させる布袋竹畑は、必ずや將來面白い業であつて、合理的に栽培さへすれば、反當り百圓内外の収入は、差程困難な問題でもなからう。

苦竹畑、大名竹畑、四方竹畑、寒竹畑等經濟的に有利な許りでなく、家庭用としては趣味の自ら滾々として湧き出るものがあるであらう。

### あけてくやしき玉手箱

蒟蒻を栽培すると、一反歩から千圓の収入がある。梨や蜜柑を作ると、反當り六百圓の收穫がある西瓜畑を經營すると、一反歩から優に五百圓を收めることが出来る。其他果樹——蔬菜——特用作物などを栽培すると、幾百圓の収入があると、能く所々できかさされる話である。——取れるか取れぬか、そんなことは詮索したくはない。——それぞれ莫大な収入のある代りに、又其支出金が少くはなからう。——だから収入金



から支出金を引き去つた、残りの金額所謂其収益は、左程驚く程に大きいものではないからう。

相当収益は多いにしても、之れに伴つて、種々特別な技術を要することが多く、一朝其技術を誤らむか、若くは技術が未熟であつた爲に、明けてくやしき玉手箱と同様豫定の収入を擧げ得ないのは勿論、甚だしきは、投資金を水泡に來せしむる場合が珍らしくない。又は病虫害や天候の不順な場合にも――。

吾々が作物を栽培する上に於て、先づ考慮を拂はねばならぬ問題は、第一に金があり多く儲かるものでなければならぬ。然し、よし金は充分に儲かるにしても、其仕事事が危険なもの、投機的なもの、若くは非常に技術を要するもの、又は豊凶交々至るやうなもの、價格に大變動のあるやうなもの……等、片時も心を安んじて、其業に従事し得ないやうな仕事では、餘りに感服し得ないのではなからうか。我田引水と云はば云へ、筍の栽培と云へば、安全な業であつて心配ない、そして危険がなく、誰

にでも出来る位に、其作業が極めて簡易であり、容易である、其上収益――即ち儲けが多い、そこが、筍栽培の妙味と云はねばならぬ。

### 追手に帆を

農村振興――。此言葉は現今到る所で喧しく朝野の識者間に唱へられてゐる問題である。――左様に重大な問題であつて、一日と雖も棄て、置く譯には行かぬ。農村自治の上から見ても、富國強兵の立場から考へても――。七面倒な議論は抜きにして、單刀直入に農村振興の根本と云へば、農村に適當な副業を奨励することに外ならないと思ふ。

副業なるが故に、本業に差支ない餘剩勞力を利用することが出来、併も資本の餘り掛からない、そして之が回收の迅速な、其仕事は容易であつて、誰の手にも出来、生産物の販路が廣く且つ確實であつて、儲かりの割合に大きい仕事でなければならぬ

い。今此條件に照して、筍栽培の得失を調べて見やう。  
 ・先づ勞力の點に就て考へて見るに、多く要する時期は冬から春の間であるが、此時期は概ね農閑の時期である。金の取れる筍の採收時期さへ除けば、其他の作業は農作物と違つて、二十日——三十日の早晚、敢て差支を見ないから、手隙を見出して實施すれば足りる位に、農閑を巧く利用し得る仕事である。新植の場合母竹を需むるのに、すこし金がない位なもので、其他は概ね自己の勞力によつて、孟宗畑ができれば、栽培ができるのだから資本としては誠に僅少なものである。植付け後二三年間農作物の間作によつて収入があり、以後は筍の收穫がある。だから資本の回収は早い譯である。作業にしても容易であり、生産した筍の販路は頗る廣く、安全な業であつて、おまけに金の儲かりが大きいときてゐるから、たけのこ栽培は農村振興上から見て、農家の副業に最も適當し、それこそ所謂、追手に帆を擧げるやうに、都合のよい仕事である。

一、孟宗畑

1 土地

石原筍

筍は何處にでも生へる。諺に石原筍と云ふやうに——。然しよく氣をつけて見ると、筍の馬鹿に早く出る所があり、反對に晩く生へる所がある。太い筍の出る所——細い筍の生へる所、優良な筍の出来る場所があり、劣等な筍しか出来ない場所がある。筍の能くでる箇所、筍の一向でない箇所などがあるものだ。そうして見ると、自ら金の能く取れる所と、其反對に餘り金の取れない所とが出来、其結果は收益の多寡に、少からぬ關係のあることは勿論である。

そこで孟宗畑を仕立やうとするに當つて、最初に研究せねばならぬ問題は、則ち其土地の選定でなければならぬ。——選定上見逃してはならない問題は、其土地の氣候

位置、地勢、土壤等であつて所謂之等の天然要素が、甘く筍栽培に適當してゐるか又は不適當であるかを確めなければならぬ。——若しも此天然要素が筍の栽培に不適當であつたとしたならば、如何に人力によつて懇篤な培養を講じ、熱心に保護に努めたとしても、既に出發の第一歩に於て、人為に於て悉く動かし得ない、大自然に缺陷があるのであるから、決して充分な成績を擧ぐることは、全然不可能のことである。それこそ勞して効の少い、骨折損のくたぶれ儲けに終るのではなからうか。栽培要素の適當した土地、言葉をかへて云ふと、適地に母竹を植付た場合には、よし人力の加はることが少いとしても、それ相當な成績は收め得べきものである。況んや、それに充分な人力の加はるに於ては、天然の力と相俟つてそれはきつと、飛び離れた好果を收め得るであらう。

### 寒地に櫻桃

寒い北海道では櫻桃の結果が良好であるのに暖かい九州地方へ來ると、とんと結果してゐるのを、見たことがない。柑橘類になると、九州地方殊に暖かい所では、頗る豊産であるに係はらず、一步——一步寒い方へ行くと、結果が悪いばかりでなく、其品質も亦良好でない。此現象は氣候の關係であつて所謂作物の郷土と云ふことに、歸着する問題ではなからうか。

孟宗竹も亦一つの植物であり、作物である以上には、氣候の支配を受けぬと云ふ譯には行かぬ。今孟宗竹の太さに就て見るに、地味も相當によい上に、懇篤な肥培を施してゐるに係はらず、東京目黒附近では、胸高周圍一尺以上のものは稀である。更に南下して、京都附近にいくると、さすがは竹林先進地だけあつて、人力の限りを盡して之を栽培してゐるが、如何せむ、尺三寸廻り以上のものは、容易に見出だすことが出來ない。それなのに、一度九州に入つて、鹿兒島、宮崎縣にいくると、天然に放任してあるものでさへ、尙且つ尺六七寸廻りの孟宗竹を散見することが出来るものである。

これ全く氣候の關係に支配せられた現象ではなからうか。

孟宗畑を經營するのには、氣候の關係上秋田縣以南の本州、四國九州、臺灣等を適當とするのであるが、就中暖かい所が適地であることは勿論である。然し寒い所では筍の價が高いことがあるから——。最低溫度が攝氏零下二十度以下の所では、餘程防寒設備を講ぜないと、應々にして親竹の枯死することがある。だからそんな所は適地とは云へないだらう。寒い朝鮮京畿道以北並に北海道樺太などは無論孟宗畑の適地とは云へない。

### 浮氣者は失敗する

男でも女でも兎角浮氣者は、とんだ失敗を演ずるのが常である。それは落付かない自ら打込が足らない、従つて根張が少いために——。杭にしても亦そうである、打込が足らぬと傾き易い、木にしても根張が浅いものは、思はぬ風に倒されることがある

それは皆天然自然の理であらう。——萬葉集抄にたとは高き義なり、又けとは古語に木をけと云ふ如したけとは其生じて高きを云ふと、そんな古いことを引き出す迄もなく、孟宗畑にしても、丈が高い割合に其の根が浅い。従つて風害に罹り易いと云ふことは、こゝに申上げる迄もないことである。

恰も住宅の床が低過ぎると、濕氣を吸収し易いから疊が朽ち易い。そして人間の衛生上から云つても亦有害である。殊に御婦人方とときは、身體が冷へ込むで、折角天から授かるべき子寶を棒にふる例がないとも限らない。同様に、濕氣の多過ぎる所に孟宗畑を植付くると、之が爲めに鞭根は冷へて子宮病を起し、筍の發生を見ないことは珍らしくない。

孟宗畑としては交通の便利な所が得である。といふのは、總ての監視に便利である肥料の運搬に便利である。産物の搬出に便利である。——左様に總てのことが便利であるといふことは、取りも直さず収益則ち儲けが大きいといふことになるから——。

それだから孟宗畑としては風當りの少ない、濕氣の多過ぎぬ、地下水の低い、交通の便利な位置を選定せなくてはならぬ。商家にしても好い位置を占めたものと、悪い位置を占めたものとは、一生涯に何程の利害を受くるか、蓋し計り知ることが出来ない、官員さんにしても、そんな關係が萬更ないとは、誰か保證し得やうぞ。

#### 初物食ふと定命がのびる

早く市場に出た青物は、きつと其値段が高い。出る量が少なくて珍らしいから——。それとも初物を食ふと、定命が六十日延びると云ふ考へから知らぬ。——取り分け青物の少い時分に出る孟宗筍では其有様がより大きいやうな氣がする。早い筍で一貫目四五圓もすることがあるのに、出盛りとなると四五十錢にも下落することがあるやうに——。だから孟宗畑でウンと金を儲けやうとするのには、須らくたけのこを早く發生させて、それを高價に賣却せなくてはならぬ、筍を早く發生させるのに

は、早く發生する土地を選定して、其處に母竹を植栽することが必要である。

氣候の寒、所よりも、暖かい所が早く筍の出ることは無論だが、同じ氣候の所でも地勢の相違によつて、たけのこの出る時期に大分早晚があるやうである。例へば傾斜地であつて、南の方に向いてゐる所は、北方に面してゐる所に較べて筍の出る時期が確かに十日内外は違ふものである。それは陽光の受け具足によつて、土地の暖まりに相違があるから——。だから丘陵——山麓などの傾斜地に、孟宗畑を仕立てるのは、其方向は東南面か南面を選ぶべきであつて北面する所は就中不良である。北面地の不良なのは、獨り陽光の關係から、土地の暖まることに遅れ發筍期が遅れる計りでなくて、常に濕氣の多過ぎる嫌があつて、繁殖力を鈍らせる場合が時としてあるから——。

平坦地頗る結構過ぎるが、此處は有利な農作物の栽培地に當つることにして、之に一步を讓る傾斜地に、孟宗畑の造成をすゝめたいのである。排水の方から見ても作業

の方から考へても、傾斜地の方が都合がよい。然し傾斜十五度以上の所では、理想的の作業は困難であることを前以て斷つて置かう。

役者が一枚上手

赤色の粘土に生へた筍は、皮が白く、肉がやはらかく、其味が飛び離れて甘い。それは獨り筍ばかりでなくて、甘藷でも午莠でも里芋でも……亦そうである。其尊い智識を経験からつかみ得た都會の人々は、誰も彼も鵜の目鷹の目で、甘い筍を漁り求めるのに敢て不思議はなからう。——總ての物事は、道によつて賢しと、此呼吸をちやんと呑み込むんだ、一枚上手の筍商人は、筍の皮に黒土の附看してゐるものは、能く之れを擦り落として、赤土のねつたものを塗つけ、それを市中に賣り廻るのである。黒土に生へて、筍の皮にそれがついてゐるものは、其味が赤土のものに較べて、確かに劣等であつて、誰も彼も相手にせないために——。取りわけ此傾向は關

西地方に多いやうである。そうすると、孟宗畑は赤色の粘土地がよいと云ふことになり、先進地京都府附近などでは競うて、皆そう云ふ所に、孟宗畑を仕立てゝゐる。なほ此地方では、赤色よりも——白色の粘土の方が、更により好いたけのこが出来ると云つてゐる、そうだとすれば白色の粘土地が宜しいと云ふことになる。

東京目黒附近などでは、火山灰の混じた輕鬆な腐植壘土で、其色は黒褐色を呈した所に、盛に孟宗畑を経営してゐる、だから此地方では、膨軟な黒色の壤土——俗に云ふクロボクが、孟宗畑の適地だなどと云つてゐる。斯ういふ土壤は赤粘土に較べて、筍の發生はよいとしても、味の劣ることは茲に論ずるだけが野暮だかも知れぬ。

岩石地、砂礫地、濕潤地……等を除くと、どこでも孟宗畑は出来るから、壤土であらうと、砂質壤土であらうと、其色がどうであらうと、儲かりさへすれば其處に植た方がよい。そして瘠地よりも、肥た所がよいことは勿論である。

色男金と力はなかりけり

土地の選定に當つて可なり六箇敷いことを云つたやうに、吾々が嫁さんを選ぶに當つても、血統、財産、家格、性質、體格、賢愚、美醜……等に亘つて、かねの草鞋で調べ廻るのが常である。悪妻は六十年の不作と云ふから——。色男金と力はなかりけりと、云ふやうに、中々理想的な者は少い、そして帶にや短かし襷にや長しと云ふ具合で、思ふやうなものが見つかり難いものである。そこでよし一つ二つの缺點はあるとしても、我慢せねばならぬ場合がある。それが多くの人の探つて來た所ではなからうか、——棄てる神あれば拾ふ神ありと、こゝが出雲の神様のお骨折であらう、お多福も三角、四角も、猫も杓子もそれぞれ配偶を見出して、更に餘りものも出來ないのではないか。

孟宗畑の土地を選ぶのにしても嫁さん選びと能く似てゐる。位置、地勢、土壤等孟

宗畑として、完全無缺な所は、そう澤山に存在してゐるものではない。だから少しの缺點があるにしても、必要な點をより多く具備してゐるならば、忍んで其處を選ぶべきではなからうか。例へば濕地では排水作業によつて、瘦地では施肥によつて、土壤の改良は客土其他の方法によつて、或る程度迄は其缺點を補ひ得るから——。土地選定上重大な問題は、實に經濟上の關係である。今假に孟宗畑としては、稍缺點があるとしても、其土地が他の農作物を栽培するよりも、若くは其まゝに放任するよりも、筍作りが遙かに有利であるならば、其處は孟宗畑とするのが得策であり。筍栽培上完全無缺の土地であつても、筍作りよりも更に有利なことがあるならば其處は孟宗畑としては經濟上不得策である。

子供に養鶏させて

自家用の孟宗筍を作り出すのが目的とすれば面積の一畝歩もあれば充分であら

う。年々此面積から五十貫目内外の筍を生産させることは、極めて易いことであるから——。其處が若し屋敷近くであれば、一面此孟宗畑を利用して、養鶏をやるのも亦面白い思ひつきである。一畝歩——三十坪の面積であれば鶏を三十羽位放飼しても、廣過ぎる位に廣いのであらう。假りに此鶏が毎日十個づゝの卵を生むものとするると、一個五錢に見積つても、其價格は五十錢であり、一箇年間には百八十二圓五十二錢となるので、其仕事を兒童などの受持にして、これを貯金させ、一面勞働の神聖な所以を會得させるなどは、至極結構なことではなからうか。屋敷廻りの孟宗畑でトリに餌をやる高島田と云ふ見合にお母さんも加勢して——。一年間には此鶏が百五十貫目内外の糞を排泄するものだから、一畝歩の孟宗畑に對する肥料としては、充分で別に施肥の要を認めない位である。

たけのこの販賣を目的とする場合では、三畝歩より五畝歩、五畝歩より一反歩、二反歩——三反歩と其面積は廣い程収入も多く、或る程度點は収益も殖るものである、

だが一人で栽培し得る面積は、普通三反歩乃至五反歩だと云はれて居る。だから一反歩の収入を四百圓と假定すると、一人の収入は千二百圓乃至二千圓と云ふ勘定になる。毫も人手を借らないものとするれば、それ以上の面積を一人で經營することは、作業に無理が出来ず許りでなく、収入も収益も亦其割合に増加せぬので不得策であらう。充分に手が廻り兼ねるから。

孟宗畑の二町歩、三町歩を經營してゐる人がある。そしてそれ相當に収入と収益を擧げてゐる、作業の忙はしい時にだけ雇人をして——。専門的に大面積の經營をやるのも、亦面白いそして有利な仕事のやうである。

更にべにや白粉をつけて

よい畑から好い子が生れる、と云ふ諺は、それがよし陳腐の言葉であるとしても萬更棄てる譯には行かぬ。少くとも孟宗畑に於てはそうである。して見ると、最初よ



い土地を選定すると云ふことは、勿論必要な問題ではあるが、尙植付る前に當つて、甘くそれを地拵へして、——より以上に完全な孟宗畑に導く事を忘れてはならぬ、鬼も十八番茶も出はなさに、更にべにや白粉を用ふると云ふ筆法からではないが——。

山林原野の未開墾地であれば、當然之れを開墾せねばならぬ、それが若しも小面積であれば、一時に開墾を終り得るのであるが、其の土地が極めて廣いとか、若しくは勞力の關係で、とても一時に、完了することが出来ないやうな場合が、絶體に無いとは云ひ得ない。そんな時に行ふ方法として先づ次のやうな方法がある。其一つは所謂點狀開墾法と云ふのであつて、母竹又は根株を植付ける所を、約一坪位宛開墾して、此處に植付け、次の年には其周圍を開墾して、鞭根の伸長を促し、三年目に残りの部分を開墾して、こゝに全く開墾を終るのである。其一つは帶狀開墾法又は短冊形開墾法と云ふのであつて、母竹又は根株を植栽する線を中心として、一間幅位の短冊形に區劃し、其處を開墾して母竹を植付け、次年に未開墾地の短冊形全部を開墾する方法

である。そして長邊の方向は、平地では適宜便利な方向でよいが、傾斜地では傾斜線に直角の方向がよい。

### 一利あれば一害あり

一時開墾法とでも假に云つて置かう。即ち一時に全面積を開墾し終る此方法、——地拵法としては吾々の最も希望する所ではあるが、然し色々な關係から點狀開墾法、若しくは帶狀開墾法によらねばならぬ場合がある。——何れの方法をより適當とするであらうか、古臭い文句で答へるなら、それは一利あれば一害ありとでも云へやう。點狀開墾法は三箇年間に亘りて耕起するのであるから、經濟上から見ても、極めて有利なりと早合點する人が無いとも限らぬが、實際にやつて見ると、机上の計算とは大違ひで、其作業が極めて困難であり。従つて經費が嵩むものである。點々と開墾するのであるから、——三箇年間の經續事業だから、一年當りの經費は、一時に開墾した

ものゝ、三分の一位で足らう杯と考へるのは間違いで、確かに二割内外位の経費は嵩むものである。然し一時に金が掛らぬだけは樂である。

二年間に仕上げる帯狀開墾法は前者の三年事業に較べて、二年間に経費を支出せねばならぬ缺點はあるとしても、其作業が容易であり、従つて効程が進み、経費が割合に少額で済むと云ふ得點がある。だから特別の場合を除いては、點狀よりも帶狀の開墾法を奨めて見たい、苦しい私の経験から――。

出來得るならば一時に、全面積を開墾して、此處に母竹を植栽し、其空地に二三年間農作物を間作して、施肥、培養すると、之れからも相當な収入を見る上に、土地は耕耘によつて膨軟となり、除草となり、施肥によつて土壤が肥るから、孟宗竹の生育と鞭根の伸長とが頗る良好となる。――謂はば一舉兩得の方法である。成林期も亦一二年は早い。損して得とれとは、こんな場合にも亦當て候まるのではなからうか。

### 鉄と奉公人とは使ひやう

開墾の方法に就ては、茲に細かく書き立てるだけの必要もなからう。それは餘りに能く知られてゐることであるから――。生へてゐたら其の木を除き、雑草を刈拂つて其處を整理し、其の跡を深さ一尺内外に耕起して、草木根、石礫などを取り除けば夫れで充分であるが、笹類の根は注意して残さないやうに取り除かねばならぬ。――二三尺の深さに耕起せよと云ふ者がある深い方は決して悪くはないが、それだけ多くの勞力が掛ることになる。それと直竹の鞭根は二尺も三尺も地中へ進入するものではない。斯ういふ二つの武器を提て、灌木や雑草の根が取り除かれ得る程度の深さ、一尺内外でよからうといつた譯である。

若し土地に起伏高低があるとしても、地拵として直に、之れを引均すなどの必要は毫もない、經費の關係からのみでなくて、將來の土置作業に便利だから――。

鉄と奉公人とは使ひやうと諺もある通り、雇人によつて之れを行ふ場合には、其使ひ方の上手下手によつても違ひ、又土地の状況によつても異なるのが當然ではあるが、一人一日の効程は、十坪乃至十五坪位なものであらう。

開墾が一先づ片付けば、必要に應じて排水設備とか、通路設備などの事業をせねばならぬ。そこで孟宗畑の地拵へは全く終つた譯である。

既開墾地では、若し其土壤が堅硬であれば、點狀若くは帶狀の開墾法に準じて、土壤を耕起するのがよい。永年作物の植付けてある場合でも、亦此方法によつてやるのが得策で、其場合母竹植栽に差支へぬものは其儘として、鞭根の伸長に従つて、漸次其作物を除去するのも、經濟上から見て有利だらう。収入を見つゝ孟宗畑になるのだから――。

2 母竹

貧乏世帯の分家

舊歴の五月十三日を竹酔日――竹迷日と唱へ、此日であればたとへ母竹を倒に植えてつけても、立派に活着するものだと言はれてゐる。――其他の日に植付けるとしても、母竹に五月十三日とさへ書いて置けば、枯死することは絶體に無い、と云ひ傳へる人さへある。

竹酔日頃には、孟宗竹では既に筍の出た後である。筍の發生後は其勢力にして亦衰へてゐる。丁度産後の婦人のやうに――。夫れ計りではない。一年間ウンと汗水たらして、鞭根の内へ貯蓄した養分も、筍の發生と發育に伴つて、全く減少し消失し盡されてゐる譯である。そうすると、此季節に孟宗竹を移植することは、恰も貧乏世帯の分家と同様、竹の金櫃なりとする鞭根に、養分の缺乏してゐる時代であるから、よし活着したとしても、其生育が最も優良なりとは、誰が保證し得やう。理窟から云つても亦それが當然であるから――。

竹酔日――竹迷日など云ふことは、昔支那から傳はつて來たことであつて、支那で

は或は適當なことであるかも知れぬが、我邦に於ては、どうも當筈まらないやうである。古は知らぬが文明の現代に於ては――。

嚴寒炎暑の時さへ避けると、年中何時でも、それ相應の方法さへすれば、母竹は必ず活着するものではあるが、無理な季節を選んで植栽をすると、種々な設備と勞力とが掛つて、植付けの經費が多く入る計りでなく、活着後の生長も悪かつたり、又は遅れたりなどする損失があるものである。だから輕濟上から見た、竹の生理上から考へた、一番適當な移植時季と云へば、當然秋期十一月頃と、春期三月頃とに指を屈せなければならぬ、春になると掘取や植付けの事に、たけのこが損傷することがあるから、何れかと云へば秋期の方を奨めて置かう。

### 壘と女房とは新しい程よい

古い程値打の出るものは書畫骨董の類であつて、壘と女房とはあたらしい程宜しい

とはチャンと昔から相場が定まつて居るやうである。女房の分だけはしばらく疑問として、壘のあたらしいのが、萬人に喜ばれるやうに、孟宗竹の母竹も亦新しいのがよいのである。

人ならば聳にせんもの今年竹、と讀まれてゐるやうに、唯だ單に新しい竹は綺麗である、見掛けがよい、氣持がよい。丁度藝者さんでも見た時のやうに――。と云ふ理由からであれば、敢て新しいものを選ぶ丈けの必要もなからう。ところが竹の繁殖機關は、何と云つても鞭根である。その鞭根も年が寄ると腐り掛け、遂には全く腐朽し去るもので、腐朽に傾いたもの、若くは腐朽した鞭根についてゐる竹は、獨り外觀が見苦しいばかりでなく、子を産む繁殖力が無いのであるから、母竹としては全然不適當である。

七八年前に内の親爺が孟宗竹を植付たのに、未だに一本の筍も出ない。と云ふ話を聞くことがある。斯う云ふのは、或は母竹の年齢が古過ぎてゐたのかも知れぬ。

母竹の年齢としては、一年生、二年生、三年位なものがよからう。就中若いもの  
よい、鞭根の勢力が旺盛だから——。二十五は娘の歳でなかりけり。と萬止むを得な  
い場合の外、四年生以上の母竹は使用せない方が安全である。鴨綠江節で其譯を答へ  
て置かう。

人でさへ、四十過ぎればアノ子供を産まぬ、まして短いアリヤ一生の……ヨイシヨ  
竹であるからヨツコリヤ母竹にはヨ、若いも亦チヨイチヨイ、若いのを選ばんせチ  
ヨイチヨイ。

大男總身に智慧が廻り兼ね

英雄——豪傑の子には、兎角偉人が生れない。と此定理が果して真なりや否やは、  
先づ識者の判断に委せやう。——竹にもそう云ふ傾向があるやうに思はれる。それは  
今此處に、太い大きな親竹を植つけたとする、所がすぐにはそんな太い竹が生へない

んだもの、反對に細い小さな母竹を移植したと假定する、其生へたものが皆笹位に小  
さなものだとは云へない、そして幾年を経過しても、一向太らないものだとは誰が斷  
言し得やう。

大男總身に智慧が廻り兼ね、とは彼の川柳子が、肥満男の遲鈍振を皮肉つた一句で  
ある。萬更斯う云ふ譯からと云ふのではないが、大きな母竹を植えても、小さな親竹  
を植付けても、何れも最初は小さい竹が生へ、——歳を逐ふて漸次太つて行くもので  
ある。それで

はびこるを恐れつ竹の細き植う。  
蝸牛の生るゝほどの竹を植う。

と誰やら、歌つた如くに、小さな竹を母竹として用ふるのが、買入れるのに母竹代  
が安い、堀取が樂だ、運搬が便利である、植付に骨が折れぬから、經濟上から見ても頗  
る得策である。

六〇  
經濟上——繁殖上から見て、孟宗竹の適當な太さとは、先づ胸高周圍五寸内外のものであらう。しかし八寸廻り以上のものは、經濟上から見て餘り推賞するだけの勇氣がない、竹幹の細過ぎるものも、亦母竹として優良なりとは云ひ得ない。然し其竹幹は細小なりとするも、其鞭根にして太ければ、母竹としては良好である。例へば皆伐後生へた竹の如きは——。更に云つて置かう。母竹としては、竹幹の細太を論ずるよりも、寧ろ鞭根の細太を論ずべきである、生へる竹の太さは、正に鞭根の太さに比例するものであるから——。

底髪蓋し笠なり帽子也

一瓜實に二丸願、三平面に四長面、五迄下つた馬の面とは、美人品評會に於ける審査の順位であつた。——所が日露戦争を一轉期として、一丸顔に二瓜實、三平面に四長面……と最上部にのみ狂ひがきた。それは日清戦役後丈夫な子供をより多く要求す

る所から、美術的美よりも肉體的美に重きを置いてきた結果である。由來瓜實顔の持主は、概ね神經質の人であり、ヒステリーの先生であつて、一般に壯健な人だとは云へない。それに較べると、丸顔の持主は至つて丈夫であり、そして多産の傾きがある丈夫な親からは丈夫な子供が生れるから——。

順位の轉倒から丸顔の得意に引き代へ、第二位に蹴り落された瓜實顔は、鏡の前に坐る毎に、慨嘆して獨り暗涙に咽び、生みの親迄も怨む代物さへ輩出した。丸顔になせ生みおとして下さらなかつたかと——。天は人を殺さずと、丁度其時であつた、二百三高地巻と云ふ、馬糞形の底髪が流行してきた。得たり賢しと、瓜實顔も長面も馬顔顔迄が、底髪蓋し笠なり帽子也と、云ふ風に、ウンと髪を前に突出して顔の半分を隠し、丸顔だましをやつたものである。孟宗竹の母竹も亦丸顔がよいので、丸顔と云ふのは下枝の低い竹である。下枝の低いものを三四段其の枝をつけて梢を伐ると、恰も丸顔のやうに見へるから——。美人中第一位を占める丸顔の竹は、人家の多い市中

にはなくて、疎生竹林か皆伐竹林か、若しくは生へ出の場所にあるものである。そう云ふところのものを母竹とするのがよい。

### 雌竹から筍が生える

竹の一番下枝が二本のものは雌竹、一本のものは雄竹だと唱へられてゐる。そして筍の生ませる母竹には、雌竹則ち最下枝の二本出でゐるものを選ばねばならぬと云ふ人がある。子供を産出するのは男でなくて、女であると云ふ経験から——。一應それにも理窟がある——。更に奇抜なのは

雄竹雌竹を一穴に植て、早く子供をササ産む様に。(米山甚句)

と竹を犬や猫と同一視して、雄竹と雌竹とを同じ穴に植るのに限るとの議論、——二本の母竹を一株に植るのだから、一本づつ植たのに、勝ることは勿論だらうが、但犬猫と同様、男女同居せねば發筍を見ないと云ふ意見には、全然賛成の意を表する

ことが出来ない。

竹の株には必ず鞭根がついてゐる。雄竹でも雌竹でも——、何れも其鞭根には、鞭芽が附着してゐる。鞭芽はタケノコになり——鞭根になるのだから、何れを母竹に選定しても、一向差支へない譯である。——だから母竹として獨り雌竹のみを選ぶ必要もなければ、又雄竹と雌竹とを同棲させるだけの親切もいらぬ、それは經濟上不得策だから——。

雄竹——雌竹と云ふのは、竹が自ら聲明したのではなく、人間が勝手氣儘につけた名稱であつて、雄竹、雌竹などと云ふ區分があるものではない。そうすれば之れはなほ更問題にならない。問題にならない問題を、問題にするなどは、問題にならない程馬鹿の骨頂である。それは丁度天寶時代に、孟宗竹を植えると、早く死ぬとの愚論が唱へられたのと好一對に——。

花嫁は臺所から

孟宗玉峰の寄生してゐる竹は、到る所に可なり澤山にある。人間にジストマやサナダムシの寄生してゐるやうに——。斯う云ふ竹は竹其ものから見ても、母竹としては面白くない。それよりも、此害虫を新しく生れ出る親竹に、——親竹にと、傳播してゆく御本尊だと考へて見ると、末恐ろしく、決して母竹としては、採用することが出来ない。それと同様に、病竹も亦母竹としては當然不可である。

花嫁は臺所から貰へ、と云ふ諺があるが、事實さうである。富豪名門のお嬢さんを貰ひ受けると、化粧と衣裳とに浮身をやつすのが日課であればこそ、容貌は花の如く床の飾ものとしては、或は適當であるかも知れないが、然し一般に體質が虚弱であつて、働きごととは出来にくいものである。遊ぶことだけは、一人まへに出来るとしても——。だから花嫁は身分の低い所から貰ふのに限るのだ、丈夫でよく働くから——。

花嫁さんと同様に孟宗竹の母竹も、亦臺所から採收するのに越したことはない。臺所といふのは、土地の肥沃な所ではなく、瘠せ地に傾いた所である。瘠せ地に育つた竹は幹もかたい——。葉もかたい、堅いから移植後には葉がしなびない。萬更鱈節と女とは堅い程宜しいといふ意味からではなくて——。

花多ければ實少し、と外見の美に過ぐるものは、其の實質が之れに伴はぬものが多い。然り恰好の孟宗竹に、枝葉が極めて多數に附着して、一見優良な母竹の如くに見えるものがあるが、實は母竹としては不良である。それは日蔭育ちであつて、枝葉が馬鹿に柔かく、死に葉が薄い。斯う云ふ竹は大低植付け後枯死するものだから——。

人は見掛によらぬもの

偉相に見へる人で、存外馬鹿な人物があり、親切相に見へる人で案外不親切な代者があり、凡人相な人で、中々の偉人才物があり、君子風に見へる人で、油断のならぬ



助平先生が有り、時としては貞淑の面を冠つた獸心の人があるから穴懼ろしや。——  
 人は見かけによらぬものである。丁度之に似て母竹も掘取には至極容易相に見へて、  
 實はそれが頗る困難なものである、かと思へば素人見には困難相であつて、實は掘取  
 の甚だ容易なものである。例へば母竹の掘取には傾斜地のものよりも平地のものが容  
 易相であるが、實は其反對に平地の竹よりも、一般に傾斜地の竹が掘り取りに容易で  
 あり、粘土地のものよりも砂地の方が、百人が百人ながら容易相に考へるものだが  
 實際母竹の掘り取に當つて見ると、砂地のものよりも粘土地のものが、どれだけ掘り  
 取に樂だか判らない。砂土のものは鞭根の侵入が深いから——。

どんな所にある竹でも、淺根のものが掘り取に容易である。だから淺く鞭根の通つ  
 てゐるものを見分ける事が必要である。淺根の竹はきつと、株元の節間が短い、そし  
 て割合に株が張つてゐる、株元に細根が現はれてゐる、——凸地には淺根の竹が多い  
 之れと反對に凹地に生へた竹には、株元が張らないで節間の割合に長い、深根の竹が

多いものである。するとなるべく母竹の掘り取には容易な場所であつて、併も淺根の  
 ものを選定する必要がある。經濟上から見て利益だから——。  
 此外經費を少くするためには、母竹の運搬に便利な所を選ばねばならぬ。遠い所よ  
 りも近い所から不便な箇所よりも便利な箇所から——。

3 養 苗

無い袖はふられぬ

帯にや短し襷にや長がし、と云ふ程度の不足であればまだしも、孟宗竹の母竹とき  
 ては

娘一人に婿八人の申込みある竹の苗。(都々逸)

と云ふ具合に中々、適當なものが見當らない。——竹材價格の安い宮崎縣でさへ、  
 需要と供給のそれが甘く釣合ぬ所からか、往々にして一株の母竹代が、一圓内外と云

ふ素晴らしい高價を唱へてゐる地方がある。そして僅か一町歩位の植付を思ひ立つたとしても、容易に其母竹が手に入り兼ねる状況である。適當なものを揃へやうとするのには、骨の折れることが一通りではない。

無い袖は振られないと云ふのが、或は孟宗竹母竹の今日の状態であるかも知れぬ。斯う云ふ時に當つても、尙日依然として手を束ねて何の手段——方法も講せないといふのは、餘りに人間としては智慧が無さ過ぎるのではなからうか。乗物は駕籠の時代を過ぎて、汽車自動車の時代に、否飛行機の時代に移らんとする時に——。尙駕籠式の母竹に甘んせんとするか。

唯だ單に天然——自然に生へたもの、中から、母竹を求むるだけでは、餘りに不充分であると云はねばならぬ。故に一步を進めて人工で之を作り出す、工風をすることが必要な問題ではなからうか。否之が實行によつて、よい好い母竹を多く安價に作り出すことが、孟宗畑を殖やして行く唯一の手段方法である。今若し杉、扁相の苗木を

林地の天然生から求めるものがあつたとしたら、必ずや衆人は其迂愚を笑はずには置かぬだらう。苗木が悪いから、經費が嵩むから、成績不良だから多數に得難いから——。獨り竹苗に於てのみ、天然生によるの時代も、今や將に過ぎ去らむとしてゐるではないか。だから、

夜も寝らずに能く働いて作りましょぞへ竹苗を。

と都々逸の一句をつけ加へて置かう。

### 濡手で粟のつかみ取り

濡手で粟のつかみ取りとそんなボロイ儲け口があるとすれば、竹苗の養成は必と此中間に敷へねばならうまい。未だ此れを實行してゐるものが、九牛の一毛位に僅少であるから——。此事業は將來必ず興るべきものであつて、頗る有望な業であると確信する。そんなことはしばらく預かりとするも、自家用方面から見ても、亦極めて必要

なことであるから、極簡単に竹苗の養成法を述べて見よう。

小規模の方法としては、早生筍の小さなものを残し、それが成長して下枝二三段  
展いた時分に三四段の下枝が残るやうに、其梢部を切斷して置けばよいのである。――  
早生筍は概ね土地の上層を蔓延してゐる鞭根から生へたものだから、掘取にも便  
利であり、母竹としては頗る優良なものであることを特筆して置かふ。

それから多數に母竹を仕立てるには、筍の生へる一箇月前、即ち二月の下旬頃に  
孟宗竹林の皆伐をやる、そうすると普通のものより稍早く、小さな筍が數多く簇生  
するものだから、筍が伸長して下枝を二三段展開した時分に、其梢部を切斷して、  
下枝三四段を存置させる。すると中々良好な母竹が出来上るものである。此方法に依  
つて仕立てた母竹は、竹林の一方から恰も開墾の要領で、母竹の掘取が出来から、其  
作業が極めて容易であり、其跡地は立派な畑地となるものだから、荒廢孟宗竹林の更  
新法としては、一舉兩得の方法ではなからうか、若し皆伐を不可なりとする場合には

幅二間内外の帶狀に區劃して、一つ飛びに此要領で母竹を養成するもよい。例へば  
やうに小さなものでも、其鞭根はキット太いのであるから、母竹としては決して棄て  
たものではない。

### 蒔かぬ種子は生へぬ

將來必ずや採用せらるべき竹苗養成法は、蒔かぬ種子は生へぬと、諺の通りに  
種子の代りに鞭根を蒔きつけて、之を仕立てる方法であらう。田植は五月――麥蒔き  
は秋と云ふ具合に、鞭根の植付け時期は發筍の一箇月前である。して見ると孟宗竹で  
は、二月の上旬から二月の下旬位であらう。其時分にひげ根があり鞭茅のある鞭根  
を掘り取つて、長さ一尺内外に切斷し、それを六七寸隔たりに併列しひげ根のかく  
れる位に覆土し、尙其上に糞をかぶせて置くがよい。すると高さ二尺内外の筍が一  
本の鞭根から一本か二本位發生するものである。其後二三回の除草と、稀薄な人糞尿

位を一二回やると、葉は濃緑色となつて元氣のよい竹苗が出来るものである。一反歩の苗圃からは五千本内外の竹苗が得られるもので、一本當りの經費は七八錢位なものであらう。

開墾地へ植付る場合には、鞭根を植付けた秋か、又は翌春に之れを移植しても宜しければ、或は二年目の秋又は三年目の春、更に丈夫な母竹になつてから定植してもよい。

此竹苗養成法は黒竹、淡竹は實に妙である。若竹も亦其成績良好であるが、獨り孟宗竹ではどうも其の成績が前者の夫れに及ばない嫌がある。それで各位の研究に依つてから、改めて奨めることにしやう。百發百中の成績を――。

4 掘取

神ならぬ身の悲しさ

掘取の作業前に豫め母竹の着いてゐる鞭根の位置が判れば、どれだけ此仕事に便利であり、そしてそれが迅速に――完全に行はれるか知れない。此意味からして、吾々は之を知りたいのは山々であるが、如何せむ神ならぬ身の悲しさは、確實に――的確にそれを知り得ないのである。土の中のことであるから――。

母竹を掘取つて見ると、枝の出でゐる方向に鞭根の通つてゐるもの、例へば竹枝が東西の方向に出でゐる竹は、其鞭根も亦東西の方向についてゐる、竹が多いものである。然し或る人の云ふやうに、どれもこれも皆そうだとはいへない。私の知る範圍では、約七八割の竹が、枝の方向と鞭根の方向とが略一致してゐるやうに思ふ。殊に林外へ林外へと生へ出る竹は、此傾向が著しく多いやうであり、鞭根の錯雜した竹林のものには、却つて竹枝の方向に直角若くは之に近い方向に、鞭根の通つてゐる竹が可成り多いやうである。

竹枝と鞭根との方向は、無論百發百中の一致してゐるといふ譯ではないが、然し

多くは此傾向を帯びてゐるものであるから、此心掛で母竹の掘取をやるといふのは、正に賢者の探るべき道でなければならぬ。言葉を代へて言へば先づ掘り取らうとする母竹の竹枝を見て、其ついてゐる方向が南北だとすれば、此母竹に附着してゐる鞭根の方向も亦、南北の方向に通つてゐるものが多いのだから、それに基づいて、略鞭根の位置を豫察し、それから仕事に取掛ると、案外早く——上手に掘取り得るものである。序に云つて置くが、同じ節から出てゐる二本の竹枝の内、其太い枝の方向に、鞭根の方向が一致してゐる場合が多いものである。

### 長持は枕にならぬ

一人で持ち運び得る母竹を植付けると、十年にして一人前の孟宗畑となり、十人で持ち運び得るやうな大きい母竹を植付けると、一年にして完全な孟宗畑となり得るものであるといふ人がある、此意味は茲にいふ迄もなく、なるべく母竹の株を大きく

掘取ることの必要な所以を暗示したものであらう、然し大は小に勝る、大は小をかなへると云つた所で、長持は枕にならぬ、スコップは耳搔にならぬと云ふ譯ではないが、母竹に鞭根の長さを一丈も二丈も掘り取つてつけたり、直径六七尺の圓形に鉢をつけたりする人には、それが生育上頗る優良なりとするも、全然之等の人々に、雙手を擧げてまで賛成するだけの勇氣は、どうしても出ない。と云ふのは、母竹の掘取や運搬さては植付に、少からぬ労力を要し、經費の掛かることが極めて多いから——。しかし如何に多くの労力と、そして多くの經費を要したにしても孟宗畑の完成が四年も五年も早く、其成績が頗る良好であると云ふのであれば、茲に一言の文句をさしはさむ必要もないのである。一文惜みの百知らずと云ふ諺があるから——。所がそうは中々問屋が卸さない、それ計りではない、もつと經費を節約して、合理的に——上手に母竹を掘り取さへすれば、それとそう大した相違を認め得ない程度に、成績を擧げ得る方法があるからである。だから何も苦しむで、そんな御丁寧な念入りの方法を

實行する必要があらう。母竹に一丈も二丈も鞭根をつけたり、二人も三人もかゝらねば持ち運び難いやうに、多くの土をつけることなどは不得策である。

### 急いでことを仕損ずる

竹枝の出でる方向を見て、鞭根の通つてゐる位置を豫察し、鞭根の長さが三尺位附着するやうに掘取ればよいのである。京都附近では「尺八」だなどと云つて、鞭根の長さは一尺八寸位でよいと云ふ云つてゐる。然し之れは苦竹、淡竹のことであらうそれには最初竹の周圍にある、雜草木を株低く刈拂ひ、唐鍬か又は十字鍬などの器具で掘り起すので、平地では問題外だが、傾斜地では竹の下部の土を掘除いて、それから左右の土を掘り除き、終りに竹の上部に器具を打込むで引き起すと、其作業が極めて容易なものである。

母竹に附いてゐる鞭根の切斷は決して亂暴にやつてはならない。人によると唐鍬や十字鍬で打ち切るものがあるが、此方法は餘り感心が出來ない。切斷部が馬鹿に損傷することがあるから——。何れかと云へば鋸か、剪定鋏の類で切斷するのによつたことはない。

急いで事を仕損ずると、まだ鞭根も切れて居らず、周圍の土も甘く離れてゐない時分に、氣早く竹幹に手を掛けて、力一杯でこれを動かすが如きは、頗る悪いことである、と云ふのは、此爲に鞭根と竹幹との附着部が動揺し、そして其處が損傷する場合がある、竹幹と鞭根との附着部は極めて細いのであるから——、そうすると植付け後其處が腐朽して仕舞ふことがある。腐つて仕舞へば折角つけた竹幹の効果はなく、秋植の場合には鞭根も枯死する事がある。だから此點は餘程注意せなければならぬ。相接近して立つてゐる二本の竹は、之れを二株にせないで、一株にして掘取るのがよい。そうせぬと、丁度二兎を追ふものが一兎も得ないやうな結果を招くことがあるから——。

作業の難易、巧拙、立竹の状況によつて、勿論異なるものではあるが、一人一日に三十株内外は掘取得るものである。

過猶不及

竹株に土をつけて掘取るのは、風や日光で根が乾燥せないから、活着し易いのは茲に論ずる迄の必要もない。そう云ふものを植込みさへすれば、よしそれが炎熱の候でも——嚴寒の時でも、決して枯死するものではない。だから安全第一百發百中主義を採らうとするなら、どうしても株に土をつけることを忘れてはならない。と云つて過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと、其土量の多きに失した場合には、獨りそれだけの効果が無い計りでなく、所謂徒勞に來するものである。延いては運搬——植付に多額の經費を要するものだから、適當な土量以上に附着するが如きは、全く無意義であり不得策であると云はざるを得ない。

理想的な鉢——適當な土量と云へば、左右に附着せる鞭根の細根と、株元にある無数の細根とを包み得る程度の分量である。だから母竹を中心として、圓形に土をつけるなどは、實に愚かなことと云はざるを得ない、鞭根は母竹の株から四方八方に出るものでなくて、十中八九迄唯だ單に左右へ出てゐるのみだから——。それで鞭根の無い部分の土は、之れを切落して、鉢の形ちはなるべく長方形にするがよい、否多くの場合そう云ふやうになるものである。

斯様に鉢をつけることは望ましいことではあるが、遠方へ輸送する場合には全部土を落して、重量を軽くするのが普通である。馬鹿に運賃を要するから——。

入るを計つて出すを節す

一家經濟の妙諦は何と云つても入るを計つて出すを節することである。——一箇年千圓の收入あるものが、千二百圓なり千五百圓なりの支出をするやうでは、決して富

を殖やすことは出来ないで、何時かは一家の滅亡を來すものである。それと同じ理窟で掘取つた母竹は、掘取前と違つて、養分なり——水分なりを吸収する根が減つてゐる。鞭根が切られてゐるから——。だから水分を吸収することが減つてきた、減つてきたに係らず蒸發機關である枝葉を其儘にして置くと、水分の蒸發量は掘り取前と同様である。そうすると水分の吸収量は少い、蒸發量は多い、其處で吸収と蒸發とのつりあいが取れない。丁度一家の収入よりも支出が多い様に——。其結果は母竹が衰弱し、遂には枯死するものである。だから水分を蒸發する枝葉を適度に切斷して、水分の吸収と蒸發との平衡を保たせることが必要である。適度の切斷とは、母竹の下枝三四段を残して、其上部を切棄てることである。

梢部の切斷は獨り水分の蒸發を制限する計りでなくて、之れが運搬にも便利であり植付後風當りが少くなるから、竹幹の動搖が少い。従つて活着し易いものである。此の點から見ても亦梢部の切斷は必要である。器具は鉋、鎌、鋸何でも構はない。

分口に竹筒を冠せ、竹皮で包み、若くは壞れ徳利などを載せて、切口の枯死を防止しやうとする人がある。其厚意に對しては竹は只管感謝する所ではあらうが、左様に手厚い取扱ひをしても、又は何等手を加へないで放任してても、何れも同様に切口から節までは枯れ、其枝のついてゐる節から下は枯れない。——で經濟上から見ればそんなことは三文の價値もない事である。

### 惚られるにも秘傳あり

金持ちになる先生には、金持ちになる秘傳があり、トン／＼拍子で立身出世する人には、夫れに相當する游泳の秘傳があり、男に惚られる女にも、亦之れに對する或る秘傳があるのでなからうか。夫はそれとして、苗木を枯らさぬ秘傳としては、第一に苗木を丈夫に仕立てること、第二に苗木の白根を乾かさぬこと、第三に枝葉を適當に缺込むこと、第四に植付けの季節に遅れないこと、であると誰やらがいつてゐる。



事實それに違いない。

孟宗竹にしても、亦そうである。枯らさないためには、適當な母竹を選ぶこと、竹の髯根——鞭根の細根をかほかさぬこと、適當に梢を切斷すること、よい季節に植付ける事に外ならない。此點さへうまく考へてやれば、例へ母竹を枯らそうとしても、決して枯れるものではない。——竹は何れかといへば非常に活着し易いものである。母竹を枯らさぬ秘傳の内、母竹の選定、梢部の切斷、植付けの季節等に就いてはもう既に説いた所だから、こゝには竹の根をかほかさぬことに就いてのみ、一言を加へて置かう。水分——養分を攝取する所は主として株元及鞭根についてゐる細根である。いはゞ細根は人間の口のやうなものである。所が其細根は赤子のやうに極めて弱い、炎暑、嚴寒に赤子を放任するやうに、日光や風に細根を當てて置くと、忽にして衰弱し遂には枯死するものである。これが枯死すれば母竹は常然枯死するより外にみちがない、だから掘取つた母竹は、直に日蔭に移すか、又は蓆などを覆ふて、日光

の直射と風に當るのを避けなければならぬ。

### 魚心あれば水心

母竹を掘り取つた所と、それを植付ける所とが、幸ひにも相接近してゐる場合には至極持運びに便利ではあるが、多くの場合隔たつてゐるものである。そこで母竹の運搬と云ふことが起つて来る。運搬法としては、距離の遠近——交通網の相違によつて無論異なるものである。——汽車、船舶、車輛、家畜の脊、人の肩等經費の掛ることが比較的少く、そして割合に便利で、迅速な方法によるのがよい。

母竹の荷造——運搬に當つて、特に留意せねばならぬことは、日光や風に根を乾かさぬ事に、竹幹と鞭根との附着部は極めて細く損傷し易いから、其處の動搖を豫防すること、鞭根についてゐる鞭芽を痛めないこと、に注意して、荷造は丁寧——運搬は迅速に行ふことが取りわけ必要がある。

近距離であつて併も鉢付の母竹であれば、別にそう特別の装置もいらぬが、若しそれが遠距離であり、株に土の無い場合には、根が乾かぬやうに充分に包装することが肝要である。甘い具合に荷造さへすれば、却々母竹は枯死するものではない。と云ふのは大正七年四月だつたと思ふが、孟宗竹の母竹を掘取つて、併も鞭根は洗つたやうに土を落とし、それを濕した藓苔で包み、菰で捲き竹製の籠に收めて、九州の久留米から——朝鮮の木浦へ向けて發送した。

所が天候の關係で船は二十七日間を要して到着した。到着した百三十五株の母竹を植付けたところ不幸にして二十六株は枯死したが、残り百九株は完全に活着してゐるさまを見た。魚心あれば水心とか、充分に注意さへ拂つてやれば、そう無暗に枯死するものではない。

5 植付

一文惜みの百損

一本の母竹を植え終ると、此處まで来いと、力限りに大音聲を張り上げつゝ、遠く離れて其周圍を一巡したものである。そうすると鞭根は猛烈として、伸長蔓延して立派な孟宗畑になるものである。と或る老人が親切に教へて呉れたことを今尙覚えてゐる。十年二十年前に一本の母竹を植付けたもので、現在一反歩二反歩の面積に廣がつてゐるものがないでもないが、若しも之が經濟上から割出された、少費多收とか云ふ考へからとすれば、それは所謂苦小賣面失大利也と、判り易く云へば、一文惜みの百損ではなからうか、確に母竹代金は僅少に過ぎなかつたらうが、一人前の収入がある迄に長年月を要し、結局算盤上から損であるから——。

一定の面積に對して、母竹数の少過ぎるのは、經濟上から見て實際に不利益である之と反對に餘り多いのも、亦不得策と云はねばならぬ。——稲苗代に種籾を厚蒔し、

若くは薄蒔に失した場合の様——。先進地京都附近などでは一反歩の面積に對して三十株位の植付くるものが多いやうである、が私は出來得るなれば一反歩に對して、五十株位の母竹を植込むのがよいと思ふ。成林の上から見ても、また經濟上から見ても。反當り五十株とすれば丁度六坪——疊十二枚敷に母竹一株を植付ける勘定である

整然と且雜然と竹植る

亂雜に植付けるよりも、規則正しく植付けた方がよい、規則正しく植付けるにしても、長方形植樹よりも、正方形植樹に、正方形植樹よりも、正三角形植樹が宜しい。と其の道の人が唱へてゐる。事實それに間違ひがあらう筈がない。それならば一體孟宗竹の植付けは、どんな形式によるのが理想だらうか。

整然と且つ雜然と竹植える。

雪府と云ふ人がこんな俳句を作つてゐる。——やうに整然と規則正しく植付けられ

たもの、若くば雜然と亂雜に植付けられた孟宗畑を見受けるものである。其何れが適當なのだらうか。それともどちらでも、一向差支へないのだらうか。私は云つて見たい、一部論者が口角泡を飛ばして唱へるやうに、箱庭的に美しく正三角形に植付ける迄の必要もなからう。竹は彼の樹木と違つて、植付け後ドン／＼と新竹が生へるのであるから——。

母竹の植付けは獨り正三角形によるべき必要はないので、例へば荒廢果樹園を孟宗畑に變更しやうとする場合には、果樹は其儘に放置して、年々收穫を繰返し、漸次衰弱するに従つて、伐採するのが利益だから、そんな場合には空所空所を見て、其處に母竹を植付けるのがよいので強ち整然と植込むまでの必要もない、植付け後農作物の間作をしやうと思ふ場合などは正三角形植付けよりも、——寧ろ長方形に植付けるのが其後の作業に便利である。だから其方法に就ては、宜しく臨機應變適當な方法によつて植付けるのがよい。

然し理想としては規則正しく植付ける方法である。——母竹数の豫定を樹てる上から云つても、はた農作物の間作をする上から云つても、共に都合がよいから——。正三角形であれば株間約二間七分正方形であれば株間約二間五分、若しくは二間に三間の長方形に植付けても、何れも反當りの母竹数は五十株である。

吉日を選んで結婚式

湧き出る汗で厚化粧の崩れる炎暑の候を避けて、涼風吹き初むる秋期から、花笑ふ春期にかけて、階老同穴の契を結ぶ結婚式を擧ぐるものが多いのは、今も昔も更に變りがない。そして行く末幸多かれと、吉日を特に選んで行はれるものである。——家を建てるにも三りんぼうとか云ふ日を忌み嫌つて、絶対に此の日には工事に着手せない。ごへいかつぎの人になると、一寸そこへ旅行するのにも、ちやんと舊曆を調べてから、出發の日を定めるものである。それが可否如何は私には判らない。

竹植える日とて朝から曇りけり。  
降りそうな空見て竹を植にけり。  
降らずとも竹植ふる日は簑と笠。  
傘さして門下の輩の竹植る。

竹植えて水やれば月空にあり。

等と有名な人によつて讀まれてゐるやうに、竹を植えるのにも、亦適當な日を選んでゐる様に見える。恰も吉日を遷んで結婚式を擧げるやうに——。文學者が見たやうに、技術者の見た適當な植付日とは、一口に云へば曇天無風の日である。曇天無風の日こそ實に絶好の植付日である。根が乾かないから——。之れと反對に、風の強い日——陽光の強い日は、適當な植付日とは云へない。そんな日には餘程迅速丁寧に作業せないと、思はぬ不結果を招くことがある。何と云つても逃へ向の植付日は、降りそうで降らぬ風の無い日である。斯ふ云ふ日に母竹を植付けて、翌日でも雨が降ればそ

れこそ、一本の枯損竹も出来ぬであらう。

### 大は小をかなへる

竹を植付けて一つ踏みつけると、筍の出るのが一年遅れ、二つ踏みつけると二年三つ踏みつけると三年……十踏みつけると十年間も筍が出ないと云ふ者がある。ほんとにそんなことがあるのか知らん。若し果してそんな現象があるものとしたら、それは植穴の掘方が浅過ぎたか、小さ過ぎた爲めに甘く母竹の株が入らない、入らないから無理矢理に踏みつけて、辛うじて植付を終つたとする。若くは砂防工の調子で、槌か何かで強く叩きつけると。そんな場合にこそ一つ踏めば一年、二つ踏めば二年……も筍の發生が遅れるのではなからうか。

母竹の株が入り得ないやうな小さな穴は無論不可能であつて、茲に論ずる迄の必要もない、大は小をかなへるといふからには、大きな植穴を掘るのに越したことはない

然し大きな穴を掘るのには、それだけ多くの勞力がかかり、延ひては植付け費用が嵩むといふことになるから、過ぎたるはなんとやらで、經濟上から見ても、賞すべき事ではない、總ての物事には程度といふものが必ずある。——植穴の太さ深さにも、亦自らそこに程度即ち適度といふものがある筈である。適當な植穴とは母竹の株より少し大きなもので、それよりもやゝ深いものをいふのである。換言すれば母竹の株が甘く入り込むで、そこに少しの餘裕がある位の穴である。

株の形が圓形であれば圓形に、長方形であれば長方形に、植穴を掘るといふことになるのであるが、普通長方形に母竹が掘られてゐる場合が多いから、従つて穴も長方形のものに掘るのが普通である。平地では別に問題外だが傾斜地では、穴の長邊を傾斜線に直角の方向にすべき事である。

### 子孫の爲に美田を買はず

借財のある家を相続するのは、誰しも好まぬところであらう。一人まへに漕ぎつけるのに、骨の折れるのがなみ大抵のことでないから——。といつて、餘りに財産があり餘ると、黄金のありがた味を解せない爲めに、碌でもない馬鹿息子が出来て、世の物笑ひとなり家名を汚す場合が無いとも限らない、とのかんがへからか、子孫の爲めに美田を買はず、子孫に財を遺すのは、絶體に宜しくないといふ主義方針から、能く蓄へた財を最も意義あることに、惜氣もなく能く散ずる人がある。——兎も角もマイナスの財を子孫に引繼ぐのは、特別の場合を除くの外罪惡であり、立派な人間の行爲だとはいへぬであらう。夫れ相當に財を子孫に傳へるのが少くとも、現代に於ける人間の歩むべき道ではなからうか。

今母竹に就て見るに、これが植穴に移されたのは、恰も新に家を持つたのとも、家督を相続したのとも、考へられぬことはなからう斯ういふ境遇に置かれた母竹を従來通りに、否なそれ以上に能く活動させるのには、これが活動の資源、言葉を代へてい

ふと、竹の食物を興へることが取分け必要である、借財は無いとしても養分が少いと手足をものがれたのにも等しい。鞭根や髯根の切られた母竹は、忽ちにして濃緑の葉色は赤色に變り、成林に長年月を要するのは當然のことである。それで穴の底へは、肥へた細かい表土を入れて、そして基肥として肥料を施し、其上に覆土をしてもよければ、又株の周圍に應用してもよいので、若し基肥として大豆粕を用ふるものとすれば、母竹一株に五合位を用ひた方がよい。

### 田植の要領

植付後其の苗木を太らせて、金を儲けやうとする樹木に較べて、母竹の植付は母竹それ自身の價格を向上させるのが目的でなくて、植付後早く鞭根を蔓延させ、筍の發生量を多くするのが主眼である。そうすると、樹木より以上に其の繁殖機關たる鞭根の据へ具合に就て考慮を拂はねばならぬ。竹幹の据へ具合よりも——。

母竹の植付が浅過ぎると、風や雨又は雪の爲めに動搖し、遂には枯死することがある。——枯死せぬまでも倒伏して、其の生育を害せられることがある。それかと云つて深きに失すると、土壤中に空氣や溫熱の侵入が不充分な爲めに、根の生育を傷ふものであり、土地によつては濕氣が多過ぎて、鞭根の腐朽する患がある。深植さへすれば、石橋を杖で叩いて渡るやうに、左様に安全なりと考へる人が無いとも限らないが其考へ方は全然不可なりと云つて置かう。

稲苗の植付けは風で倒れない範圍に於て、浅植するのを最も尊ぶものである。竹も稻と同様禾本科植物である、だから竹も亦同様浅植を可なりと云ふ譯ではないが、何と云つても深植は禁物である。——適當な植付けの深さとは、其母竹が掘り取前地中に入つてゐた部分が、丁度土中に入る位の程度を云ふのである。竹幹の地中に入つてゐた部分は、空中に露出してゐた部分よりも、幹色が淡く誰の目にも一目瞭然と判るだから其色の淡い部分を埋込み得る程度がよいのである、然し乾燥地土壤の膨軟地、

風當りの強い所では心持深い目に、濕地では稍浅い目に、植つけるなどの手加減は勿論必要である。殊に濕氣の多過ぎる箇所などでは、穴を浅く掘り盛土をして植える位にする方がよい。

忠ならむと欲すれば孝ならず

●母竹植つけの深さが判つたから、其次に起るべき問題は、鞭根の据具合でなければならぬ。普通の樹木であれば、根を甘く四方へ配ればよいのであるが、竹では稍その趣が異なるのである。鞭根は地表に平行させて据なければならぬ。地表に平行——もつと判り易く云へば、鞭根の兩端から地表迄が各同じ深さに据へることで、例へば一方の鞭根の端から地表迄の深さが五寸であれば、他方の鞭根の端から地表迄の深さも、亦五寸であるやうに鞭根を据へるのである。

竹幹に鞭根が直角についてゐる母竹では、竹幹を真直にさへ植付くれば、植ね鞭根

は地表に平行するものではあるが、竹幹が鞭根に直角についてゐない母竹たとへば、傾斜地にあつた母竹で其の鞭根が傾斜線に平行してゐた場合の如きは、決して竹幹は鞭根に直角についてゐない。斯う云ふ母竹を真直に立て、植付くると、必ずや鞭根の一方は深く——一方は浅くなつて鞭根は地表に平行せない、忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならむと欲すれば忠ならず、と平重盛の言の如く、竹幹を真直ならしめんと欲すれば、鞭根は地表に平行せず、地表に鞭根を平行せしめんと欲すれば、竹幹真直とならず。この場合には竹幹其のものよりも、鞭根の方が將來の繁殖上に、より以上に必要であるが故に、竹幹は傾いても横むいても構はないから、鞭根を地表に平行させて据へるのが適當である。竹幹にのみ目を留めて、鞭根に意を拂はないのは抑愚の骨頂と云はねばならぬ。

他人の土地へ筍が生へる

此世智辛い時節に金をかけて竹を植え、他人の土地へまでも筍を生やしてやる親切者のあることを所々で見せつけられてゐる。其度毎に何と云ふ奇特な——殊勝な行爲であらうと、衷心から敬意を表し、真から我國民律の麗しいのを心強く感ずる一人である。此麗しい行爲がほんとは、美しい心から湧き出たのであらうか、それともそんな考へは毛頭なかつたのであるが、竹の鞭根は勝手氣儘に他人の隣地へ侵入して其處に筍を發生したのであるか、其邊のことは植付けた本人に問はねば勿論判らな

いが、私は前者の方ばかりだらうと、そう善意に解釋して置かう。

鞭根の先端を切斷すると、その附近にある鞭芽が鞭根となつて、盛んに伸長するものである。その伸長する方向が横の方であつたり、又は母竹鞭根の伸長方面に逆進するものとしたら、吾等は別に問題とするのではないが、その伸長の方向は概ね母竹鞭根の伸長方向と同方向である。言葉をかへていへば鞭根を切斷すると、新鞭根は母竹鞭根の進みつゝある方向に伸長するものである。斯ういふ事實が明瞭に判つてゐる場



合、周圍に植付ける母竹には、その鞭根の据付け方を注意せなければならぬ。といふのは誤つて鞭根の伸長方向を外方へ向けておく、すると新に出来た鞭根は外方へくと伸長して、遂には他人の土地へ侵入し、其處にたけのこを發生するものである。すると隣接地の所有者は迷惑を感じる、自分の土地はそれだけ成林期が遅れる、と云ふ不利を來すものだから、周圍に植込む母竹だけは、鞭根の伸進方向を自分の地内に向はせる必要がある。鞭根の節々にある鞭芽の頂きが向いてゐる方向は、即ち鞭根の伸長方向である。

### 若い男女の戀愛のやうに

傾斜地にのみ注意を拂ふべき鞭根の据へ具合は、それを峰から谷の方向でなくて、傾斜線に直角の方向に鞭根を据付くるのである。それは植付の作業に便利である計りでなく、植付後の成績も亦好いやうであるから——。そう云ふ地勢の所では斯ふ云ふ

積りで穴を掘らねばならぬ。

以上の注意によつて理想的に母竹が据へ付けらるれば、其處で石礫や木片其他のものが入らない、能く肥た細かい表土で、之れを埋めるのである。——植穴の深さで云へば約五六合目まで覆土した時分に、株と土とが具合よく密着するやうに、軽く竹幹を持つて揺か、又は棒などで軽く周圍から突くのがよい丁度相愛する若き男女が互ひに、堅く強く相吸引し——相密着するやうに——。突けば活く突かねば活かぬ竹の苗と云ふ諺が京都邊にあるが、此邊の具合を甘く物語つてゐる。やうに根と土とが相密着さへすれば、竹は必ず活着するものである。それが濟めば此度は敢て土壤を選ぶまでの必要もないから、穴を掘つた時の土などを覆ひ、地表の線より稍や高い位の程度で覆土を止め、母竹を握つて之れが動揺を防ぎつゝ、軽く株先を踏むのである。殊に砂地などでは能く踏付るのがよい。

株の踏付が終れば母竹を中心として、半径三尺位の圓形に、厚さ一二寸になる位

に藁を敷き、土壤に適當な濕氣を持たせ、一方防寒——防暑の作用と、傍ら雜草の發生を阻害せしめるのである。材料は獨り藁でなくても、刈草、麥稈其他の稿稈類で充分でめる。敷藁のうへには薄く土を覆ふて、之が散亂を防がなければならぬ。此周圍から土を取つて出來た溝に肥料を施し覆土してもよいのである。

轉ばぬ先の杖

俛して拾ふあり、仰いで取るありと貨殖傳に書いてあるが、諺にも亦轉げても徒手では起きぬと云ふことがある。——轉むでも尙且つ何物をも掴むのであれば、轉むでも可、若くは俛するも亦仰ぐも可なれども、母竹にしてはそう甘い具合にはゆかぬ植付後それが動搖してさへ勢力が衰へる、況んや倒れる場合などは、多くの場合枯死することがある。更に附け加へて置かう、植付後母竹を動搖させぬのは、之れ全く活着に導く母であり、動搖は地獄へ陥いれる惡魔であると——。

母竹の活着を希ふならば、須らく轉ばぬ先の杖に、母竹に支柱を施すことが必要である。眞直に植はつた母竹には三方から三本の支柱を、傾いた母竹には傾いた方から二本の支柱を用ひ、繩でしつかり丈夫に縛つて置かねばならぬ。鞭根に竹幹が直角についてゐない母竹を眞直に植付くると、鞭根の位置から云つて悪い計りでなく、理想的に鞭根を地表に平行して据付けさへすれば、母竹は當然傾くことになるから、二本の支柱で事足るのであるが、眞直に竹幹を立てた爲めに、三本の支柱を要する事になるので、之こそ一舉兩損とでも言ふのであらう。支柱の材料は木でも竹でも構はないが、便利な點からいへば二三寸廻りの竹に越したことはない。母竹が高ければ従つて高い支柱を必要とするのだから、母竹の丈けの高いものは支柱費から見ても亦損である。

母竹に鉢がついて居り、そして丈けが低く、風當りの少いところに植付けた場合には何も杓子定規的に支柱を施すの必要を認めない。

### 目量の人には先づ水を

めまいを起して卒倒したひとには、先づ水を飲ませ氣付薬を飲ませて、生氣つかせるのが順序である、それと同様に暑い時分に掘り取った母竹、運搬に長くかゝつた母竹掘取後直に植付けの出来なかつた母竹、株に少しも土のついてゐない母竹などは、其の根が日光や風に當つて、時としてめまいを起してゐる場合がある。斯う云ふ虞のある時には現に京都附近で専ら行つてゐる、水殖法によるのが極めて安全な策である。

一體水殖法と云ふのは、植穴の内に細土を入れ、水四五升を注いで泥土とし、其處へ母竹をすへ、二三回それを前後左右に動かして、よく泥土と株とを密着させ、土をいれて地表よりやや高い位で止め、竹の株元へ一二升の水を注ぎ、敷藁し支柱を施す方法をいふのである。水の運搬に不便な箇所では、深さ二尺——直径五尺位の圓形の池を作り、其内に水と細土とを入れて、恰も土粥のやうに攪拌し、其内に母竹の株

をいれて、これを植付けてもよい。

水殖法は活着安全な方法には相異なるが、水を注ぐなど夫れ丈け多くの手数がかかる方法であるから、特別の場合を除いては用ふべきでない。水の得難いやうな所では尙更多くの經費を要するから——。私は今迄に可なり多くの母竹植栽に當つた。そうして大低七面倒な水殖法によらぬ普通の方法をやつた、が未だ曾て失敗を演じた覺がない。——株に土をつけて掘り取つた母竹を、掘り取つた日か又は其翌日位に植付る場合などは、無論水などを用ふるの必要を認めない。

### 6 株 植

#### 禍を轉じて福となす

明治二十七年の昔、遠方から黒竹を取寄せて植付けた所が、誤つて家の下男が株元から折つて仕舞つた。竹に熱狂してゐた自分は此狀を見て、非常に立腹はしたものの、

さりとして今更致し方もなく、最早筍は出ないものであらうと断念して、其儘に放任して置いたのである。

禍を轉じて福となすと、諺の通りに折れた株元から意外にも三本の筍が出たのである。之に反して竹幹のあるものからは、一本の筍も発生せない。此珍現象を見せつけられた予は、不審の餘り更に四五本の黒竹を株元から切斷した、ところが日ならずして、各株から一二本の筍が出た、其の後白竹其の他の竹に就て、竹幹を切斷した株と、竹幹をつけた母竹とを植付けて、試験をして見たのであるが、何れも竹幹の切斷したものからはたけのこを発生せしに、竹幹のついてゐる母竹からはたけのこの発生する事が極めて少かつた。以來益趣味を感じ他の竹に就ても試験せしに、亦來前と同様の結果を得た。

以上の如き成績を収めた予は、竹の移植には竹幹を附ける必要はなく、寧ろ竹幹の無い方が知つてたけのこの発生が確實である事を知つた。それ以來予は此方法を探り人にも亦奨めてゐるが、何れも好成绩を得てゐる。これは従來の方法に較べて、一見甚だ奇異の感を起させるかも知れないが、元來竹は根莖植物であつて、彼の農作物である里芋、薑等と同様、地下莖である鞭根を株と共に移植すればよいので、強ち莖たる竹幹をつける必要の無いことが、自ら了解せられることであらう。とは我邦の竹林翁——坪井伊助氏の談である。數年前私は親しく坪井翁の竹林談を聞いたが、大正十四年遂に此世を去られた、實に惜いことである。

### 一利一害

坪井竹林翁の發見せられた株植法は、一名これを坪井式植付法とも云はれてゐる。此方法は手取早くいへば、母竹の竹幹を伐採した株のみを植付する方法である。植付の時期は母竹植付法のやうに、何時でも行ふといふ譯には行かない。一番適當なのは筍の將に発生せむとするときであつて、其他の季節には先づ不適當である。孟宗竹

では先づ三月の上旬頃を最も適當とする此時季にさへ植付ければ、恰も里芋や甘薯を移植したのと同様、鞭根の内には充分な養分があり、既にたけのこの出やうとする時であるから、たけのこが生へそれが生長するのは當然である。

年齢は二三年生のものであつて、その太さは五寸内外のものが適當であるから、そんな竹を選んで掘り取り竹幹を伐去つて、面積一反歩に七八十株位植付けるものである。此方法によると、きつと其の年にたけのこが生へる、生へぬものは枯死したものであると思はねばならぬ。

この方法は株のみの移植であるから、これが運搬に便利であり、植付け後竹幹が無いから支柱がいらない。——だから遠方から運送する場合など、至極都合がよいと云ふ得點がある。一利あれば一害ありと、實際にやつて見ると、母竹植付法に較べて、植付け後一人前の孟宗畑になる迄に、株植法は一二年間遅れる缺點があるやうに思ふ植付け當時株植のものが竹則ち、地上莖を形成するのに主力を費やす代りに、母竹植

付けのものは地下莖則ち、鞭根の蔓延に主力を傾けるために——。それで近くに母竹がある場合には、わざわざ竹幹を切り棄てないで、母竹のまゝ植付けるのがよい。

7 誘引

蟻の甘きを集まる

地積と人口——食糧と人口——天産と人口……等、斯う云ふ問題に思ひを走らせた時、誰しも頭の中に浮ぶ事は、海外への移住と云ふことではなからうか、然り海外移住問題は我邦としては重大な問題である。否我が國民は神から海外發展と云ふ一大事を運命づけられてゐると思はれる。——外へ外へと我國民が活動するやうに、竹も亦新天地を求めて進展せねば止まぬやうな性質を持つてゐる。僅か一株の母竹を植栽して、放任して置いたものでさへ、二十年間を経過して二反歩の面積に廣がつてゐる竹林を見たことがある。こんな實例は到る所に轉がつてゐる今日九州地方に見る廣

大な竹林は、總てこう云ふ竹の自力によつて、出来上つたものだと言つても、そうした誤りはなからう。外へ蔓延する性質を甘く利用して、孟宗畑を造るのが、取も直さず鞭根誘引法と云ふのである。

自然に放任してさへ隣へ隣へと占領蔓延するのであるが、もつと早く——もつとよい孟宗畑を仕立やうとするのには、更にこれに人の力を加へなければならぬ。孟宗竹は古から南へ南へと延びて行くものだと言へられてゐる。——事實左様な傾きが無いでもないが、それよりも鞭根の誘引——伸長に大關係を持つてゐるものは、土地の養分である、例へば孟宗畑に接續して桑園があり果樹園があり菜園があつて、それに肥料を施して栽培すると、竹の鞭根は素晴らしい勢を以て、此處に侵入し、折つても掘つても筍が生へて生へて始末にをへないものである。傾斜地で上部が肥土であれば上方へ、下部が肥土であれば下方へ、鞭根がよりよく——早く蔓延するものである。丁度蟻の甘きに集まるやうに——。そこで

たけのこ はたけどな  
筍 や畠隣りに悪太郎。

たけのこ  
竹の子や垣せぬ庭の掃どまり。

などの俳句が生れて來た譯であらう。

別嬪さんに若い男が

若い男は娘の方へ、竹は肥地(戀地)に手を延ばす。

と都々逸文句のやうに、竹の鞭根が肥料分の方へ侵入する性質と、更に鞭根は土壤の膨軟な所へ侵入し易い、土壤の堅硬な所へよりも——。それで孟宗畑若くは孟宗竹林に隣接した所を孟宗畑にするのには、先づ之れに沿ふて幅二間内外の部分を開墾して、土壤を膨軟にし更に、刈草、藁其他の肥料を施用するか、又は農作物を栽培して特別に多量に肥料を施用すると、略一箇年間で鞭根は其處へ侵入して來るものである。別嬪さんに若い男が吸引せられるやうに——。鞭根が侵入さへすればきつと竹が生へ

る、其生へた竹は初めから太い、此點は確かに鞭根誘引法の得點と云はざるを得ない  
それと母竹とか株とかを植付ける必要のないのも、亦此方法の利益な所である。毎年  
此方法を繰返してさへ行けば、経費は少なくて孟宗畑を仕立つることが出来るものであ  
る。

しかし此方法は一時に大面積の造成が出来ないと、既成畑若くは竹林に沿ふて、  
直角に細長い土地を孟宗畑にするには、特に長年月を要する不利がある。斯様な場  
合に此缺點を補ふのには既成林の反對の方向に母竹を植栽するがよい。既成林の隣接  
地が開墾地であるか、又は一時に開墾した場合には、其處に農作物を栽培し竹の侵入  
し來るに従つて、漸次孟宗畑にして行くのも宜しい。

罰せられぬ泥棒様

他人の孟宗畑又は孟宗竹林に接續して、持つてゐる土地を孟宗畑にするには、前

に述べた通りで好いのだが、若し其境界に溝のある場合には、一寸斷つて一時之を埋  
める。溝に水氣のある場合には其底に粗朶を敷き土を盛つて、極力鞭根の誘引に努  
むればよいのである。鞭根が既に侵入し、そして竹が生へることになれば、鞭根の後  
戻りを止めるといふ世間狭い考へからではないが、境界を明かにするといふ看板から  
前に埋めた溝をさらへて置くことが大事だ。溝の幅が廣く水のある場合には、そこに  
架橋をして鞭根を渡すことがある、架橋といふは、太い竹の節を抜き其の内に肥土を  
つめたものゝことで、鞭根の尖端を此竹筒の内へ植けて置く、すると鞭根はすん／＼  
と其の橋を渡つて、自分の土地へ侵入し、そして筍が生へることになる。其の時に  
竹橋を取り除けばよい。

鞭根が一所に集まり、或所には毫も來ぬ場合がある。そんな時には鞭根の多い部分  
から、空地の方へ鞭根の先端を植け、杭などで固定させて置くと、思ふ通りに伸長蔓  
延するものである。

他人の財物を窃取したものは、窃盗の罪となつて懲役に處せられ、奥様を一寸失敬すると姦通罪を構成するものである。——他人の土地から鞭根を誘引して、自分の土地に孟宗畑を造成するのも、云はば一種の鞭根泥棒であつて刑法上の術語を借つて云へば窃盗であるところが、鞭根の誘引だけは、確に窃盗の行爲であるとしても、竹林主も一向怒らない、法の上にも之を罰すべき何等の條文がない、だから遠慮せずに堂々と鞭根の誘引を講ずべきである。

8 間作

胡瓜の蔓を摘心した様に

六坪に一本——十二疊敷に一本の母竹を植付た孟宗畑、母竹と支柱とが一坪の面積を占領するものと假定しても、残りの五坪——十疊敷は空地の姿であつて、未だ利用せられてゐない土地である。これを此儘に打棄て、置くと云ふことは、寔に惜しいこ

とである。それで其空地を耕かして、此處に蠶豆を蒔付け大豆を作り、又は蔬菜類を栽培することをすゝめて見たい、農作物を間作すれば夫れ相當の收穫がある事は勿論だが、これによつて土壤の耕耘が行はれ、作物の施肥によつて鞭根も其恩典に浴し得るものである。それよりも吾々が見逃し得ない點は、農作物の間作によつて知らずしらすのうちに、孟宗畑栽培の行事とする除草が行はれることである。何か農作物が栽培してあると、勢ひ除草も行はれるものであるが、孟宗畑と云ふだけでは、往々にして除草が大儀に思はれ、つい遅れ勝ちとなるものだから——。

農作物を間作すると、鞭根をきずつけるをそれがあるから悪いと云ふ者がある。一理はあるが論旨の如くに、神ならぬ人間では時として鞭根をきづけて若しくは切斷することもあるだらう。然し切斷したとしても、悉く竹が枯死するものでなく、胡瓜の蔓を摘心した様に、切れた所からは又あらたに鞭根が出来、それが伸長するものであるから、そう心配するだけのことはなからう、かう考へて來た私は、母竹の附近を



適宜にのこして植植け後二三年間は、是非農作物の間作をやつて貰いたいと思ふ。慾を云へば豆科植物のやうなものを餘り深耕せずに、多量の肥料を使つて――。

9 除 草

色氣が減つて慾氣が殖え

昔植では其年――秋植では其翌年になると、盛んに雜草が発生繁茂するもので、之を自然に棄て、置くと、殖えて殖えて始末にをへぬものである。借金の利子のやうに――。歳が寄つては顔の皺が殖え、色氣が減つた代りに慾氣が殖えるやうに、殖えて來る雜草、其の儘に放任して置いては、折角金をかけて開墾したのも水の泡、元の通りの草山になるのは云ふ迄もない。時期が少し遅れてさへ、除草には中々骨が折れ、經費が餘計にかゝるものである。それだから除草の時期は遅れないやうに、何れかと云へば早い目に草の小さな時分に、晴天の日を選んで削り去らなければならぬ。雜草

が繁茂してから一回の除草をやるよりも、雜草の小さな時代に二回行ふのが、却つて勞力が僅少で濟む場合があるから――。草に追はれずに――草を追ふのには、先づ筍の出るのが終つたら、直に第一回の除草をやり、それから九月頃迄の間に、二回位の除草を行ふ必要がある。

孟宗竹を植込んでさへ置けば、それで一人前の孟宗畑になるものだ杯と早合點して除草を等閑に附する者があるやうである。――末は野となれ山となれで、何ものにかはなるであらうが、ほんとに金の儲かる孟宗畑には、きつと成り得ないことは明かである。雜草が養分を奪取するから、土壤を冷湿に導くから、土壤を緊縛するから、――。尙總ての作業には不便である。此の狀況は單に孟宗畑ばかりではなからう。蔬菜園にしても雜草が繁茂してゐるやうでは、當然充分な收穫は得られぬであらう。果樹園然り特用作物園然り、田畑の普通作物にしても、皆其の軌を一にしてゐるではないか。

## 座して食へば山をも空し

足は足なくして走ると云ふ諺があるが、錢のことをお足と云ふのではないか、錢則ちお足なるが故に、油断をすとお足が走るのは當然である。走るお足をしつかり押へて居らぬと、御ん金は世間を廻る武士なれど、貧の内には宿を召されぬと、或時某村長様が教へて下さつたが、其通り殊に貧家には中々金は舞込むものではない、だから使ふ計りで取らないならば遂には借金が出来——借金で首が廻らなくなる。親譲りの財産がある人にしても、何時かはきつと無くなる時がある。

孟宗畑にしても亦其理窟は能く似てゐる、と云ふのはたけのこが發生し、それが成長するのには、必ずや土地から養分を攝取するに違ひない、其養分を取つて太つたたけのこを採取するのであるから、それだけ其の土地の養分が減少するのは當然であら

う。これは恰も支出計りで収入の無い家庭と同様である。家に充分な財産があるやうに、土地の肥沃な孟宗畑ではすぐに、衰退の状況が現はれぬとしても、消費した丈け養分の減少することは勿論である。泥んや地味瘠薄な孟宗畑に於てをやである。座して食らへば山をも空しと、働かずして食へば如何に大きな富を有するとしても、遂にはつきる時がきつとくる。其諺は古いにしても眞理は今尚變らない。そこで永遠に一家を保つて行くのには、働いて収入を擧げる必要があるやうに、孟宗畑を立派に維持して行くのには、養分を補給するために肥料を施さなくてはならぬ。大正十五年二月號のキングと云ふ雑誌に、公侯伯子男爵よりも國を富ますはこゑひ杓、と云ふ都々逸が載つてゐた。そんな大きな問題は私には判らないが、孟宗畑から金をより多く儲けるのにはこゑひ杓の力に俟たねばならぬことを斷言しておこう。

## 借金には利子がつく

一體筭の中に含まれてゐる、肥料學上から見た三主要成分は、どれ位なものだらうか。試みに農家寶典を繙いて、其分析表を調べて見ると次の如くになつてゐる。

▲水分九一、四〇 ▲灰〇、七九 ▲窒素〇、三五 ▲磷酸〇、〇八 ▲加里〇、四五  
今此の數字を土臺として、筭百貫自の内に含まれてゐる、三主要成分を算出して見ると

▲窒素三百五十匁 ▲磷酸八十匁 ▲加里四百五十匁

である。だから百貫目の筭を採收すると、此の量だけが孟宗畑から減ることになる。減つた此の分量だけを返濟すればそれでよいと云ふ理論にはなるが、實際は夫れでは充分だとは云へない、萬更借金に利子がつくと云ふ譯からではないが、例へば吾人の養物にしても食ひこぼしが出来、鼠に引かれることがあり、時としては腐敗してたべられぬことがあるやうに、施した肥料を悉く竹か食ひ盡さないから——。施肥量の内今竹の實際に吸収する率を窒素六割、磷酸一割五分、加利五割と假定す

ると、——百貫目のたけのこを採收した孟宗畑には、次の如くに三要素の量を施用せねばならぬ勘定になる。

▲窒素五百八十四匁、▲磷酸五百三十四匁、▲加里九百匁

土壤に含まれてゐる成分、細菌の遊離窒素固定量、土壤の窒素吸收量、降水量による成分の供給、落葉枯枝枯草の還元成分、肥料の種類等それ等の差異——多少によつて、施肥量に相違が出来るのは、當然過ぎる程當然のことではあるが、親竹に必要な分量も亦推定して、施肥量の標準を示して見やう。

たけのこ百貫目に對する施用三成分量

▲窒素七百匁 ▲磷酸六百匁 ▲加里一貫匁

腹がへつては戦が出来ぬ

乳呑子を持つ婦人は食ふても、食ふても腹が空くそうである。太つて行く子供に乳

を吸ひ取られるから——。植付た孟宗畑が丁度其通りである、鞭根が延び——筍が生へるために——。此の當時餘り筍を採らないから、施肥の要はなからう、若くは收穫したたけのこは極めて少なかつたから、少量な肥料を施せば足れりなどと考へるのは、恰も乳呑子を持つ母親に、充分に食物を與へぬのと同様に愚かなことである。一二の例外は別としても、壯丁則ち満二十歳に達する迄は、未だ一人前の働きは六箇敷ものである。一人前の働きは出来ないとしても、將來一人前の活動をするのに必要な骨格を造りあげる爲めには、成年に敢て劣らない位に、能く食ふのが普通である。私などは天から恵まれた子福長者の一人であるが、食卓の賑ひはまるで戦争場のやうである。——十四五歳の子供が却つて妻以上に飯碗の数をかき込むのに、家内一同何時も舌を巻いてゐる状態である。孟宗畑を植付けて四五年目頃から、六七年目頃迄が此状態をつくりではなからうか。植付け後一年増しに筍の出方は殖えては來るが、七年目頃までは未だ一人前の筍を生産せない。然し成林して十二分に活動するため

に肥料を要求する量は決して、其の筍の生産額を以て直に判断することは出来ない。夫れ位に充分に肥料を施さなくては駄目である。植付け後八年目頃になると、人間が徴兵検査を受け一人前の人間になつたやうに、孟宗畑も亦一人前に成林するものである。それからは連年其畑の能率に對する報酬を支拂はねばならぬ。腹が減つては戦が出来ないから——。

財布の紐の締加減

主婦の掌る臺所の經濟にしても、都會と田舎とによつて自ら相違があらう。——財布の紐の締加減によつても、亦そこに少からぬ相違が出來て來やう。左様に施用量にしても、一定不變のものではなくて相違の生ずるのが眞實であらう。だが参考のために、孟宗畑を仕立てから一人前になる迄の、一反歩當りの施肥量の標準を示して見たい、之れが運用に就ては賢明な讀者各位に委せう。

孟宗畑一反歩施肥量の標準

- 第一年目 ▲窒素五百匁 ▲磷酸四百匁 ▲加里七百匁(大豆粕一玉内外)——又は人糞尿百貫目内外施用)
- 第二年目 ▲窒素一貫目 ▲磷酸八百匁 ▲加里一貫四百匁(大豆粕二玉内外)——又は人糞尿二百貫内外施用)
- 第三年目 ▲窒素一貫五百匁 ▲磷酸一貫三百匁 ▲加里二貫目(大豆粕三玉内外)——又は人糞尿三百貫目内外施用)
- 第四年目 ▲窒素二貫目 ▲磷酸一貫七百匁 ▲加里二貫九百匁(大豆粕四玉内外)——又は人糞尿四百貫目内外施用)
- 第五年目 ▲窒素二貫五百匁 ▲磷酸二貫目 ▲加里三貫四百匁(大豆粕五玉内外)——又は人糞尿五百貫目内外施用)
- 第六年目 ▲窒素三貫目 ▲磷酸二貫六百匁 ▲加里四貫三百匁(大豆粕六玉内外)——又は人糞尿六百貫目内外施用)
- 第七年目 ▲窒素三貫五百匁 ▲磷酸三貫目 ▲加里五貫目(大豆粕七玉内外)——又は人糞尿七百貫目内外施用)

大豆粕と人糞尿とを例に採つたが、其成分量さへ略ぼ同様であれば、肥料の種類は何でも一向差支へがない。

隠徳あれば陽報あり

相當の保護と培養とを惜まないならば、植付け後八年目頃にもなると、堂々たる一人前の孟宗畑になつて、一人前のたけのこが取れるやうになる。一人前の收穫物を生産するに必要な成分を供給せなければならぬ。今假りに一反歩の孟宗畑から五百貫目のたけのこを生産するものとすれば、其内に含まれて居る三成分を満たすに必要な施用量は

▲窒素三貫五百匁 ▲磷酸三貫目 ▲加里五貫目

で、少くとも之だけの成分を孟宗畑に與へなければならぬ。それで孟宗畑一反歩には少くとも年々人糞尿であれば七百貫目内外、外、籾粕であれば五十貫目内外に加里肥料を併用、腐熟堆肥であれば七百貫目内外、籾粕であれば四十貫目内外に加里肥料を用ひ、大豆粕であれば七玉内外、菜種油粕であれば七十貫目内外、骨粉であれば百貫目内外に加里肥料を、乾燥した焼酎粕であれば六十貫目内外に適宜の磷酸加里肥料を、米糠であれば二百貫目内外を施すのがよからう。——一寸断つて置くが以上は唯だ單に、一例を挙げたのに過ぎないのであつて、甲地にも乙地にも丙地にも、最も適當な理想的の施肥量だと云ふ譯ではない。

此の外に間接直接の肥料として、連年反當り五貫目位の石灰を撒布するか、又は二三年目毎に十貫目位の石灰を施すことが必要である。酸性になり易い土壤を中和させるために、親竹の生育に必要なために——。隱徳あれば陽報ありと、斯う云ふ具合に

隱徳を垂てこそ、春になると地面からむくくと、少からぬ陽報が現はれて來るものである。

千里の馬

子曰過猶不及と論語の中に見えてゐるやうだが、孟宗畑の施肥量ときては、此名言に當てはまらないやうである。施肥量が多ければ多ただけ、それだけ收量が殖え収入が多くなるから——。數年前和歌山縣の人が見えて、談偶施肥量の話が出た。私の方では孟宗畑一反歩に六十玉の大豆粕を施して、六百圓内外の収入を擧げてゐる者がある。私の耳には新しいことを話して呉れた。——一玉の大豆粕が二圓五十錢するものとすると六十玉では驚く勿れ其價格は百五十圓ではないか、然し百五十圓の肥料代も惜氣もなく使つたならばこそ六百圓内外のたけのこ代が得られたのであらう。私は大正十四年十月祖母が永眠した爲めに、郷里京都府の田舎に歸省した、所がど

れもこれも親竹の葉色が青いのではなくて、皆黒々として垂れてゐる、一夜請はれて竹林講話をおへた席上、聴客の一人から斯ういふ話を聞いた。村の某は孟宗畑の栽培に非常に熱心で、人糞尿をやる——大豆粕を施す、蠶糞を撒くといふ不言實行家であるが、水心あれば魚心とやら、本年は反當りに換算すると、驚く可し千圓の收入を擧げてゐたと、孟宗畑一反歩から千圓の收入といへば、ざつと蠶繭百貫目の價に相當し一石三十五圓の玄米であれば、約三十石の價格と略匹敵するのではないか。蠶繭百貫目——玄米三十石の收穫には、少からぬ資金とそして多くの勞力とを要するものである。千里の馬には確かり食はせぬと、偉大な活動はせないと云ふことである。孟宗畑にしても亦確かり肥料を施さないと、平凡な働きしかせない。萬物の靈長たる人間にしても、亦そう云ふ傾きがあるではなからうか。

布經ない經には袈裟落す

先進地京都附近などでは、孟宗畑一反歩の施肥量としては、人糞尿六百貫目内外を施したり、大豆粕六十貫目内外を施したり、或は鶏糞二百貫目内外を施したり、或はこれ等のものを適宜合せて用ひたりしてゐる。斯様に肥料を用ふればこそ親竹の葉は濃綠色を呈し、キラ／＼と油ぎつた光澤を帯び、房々とした葉は下方に垂れてゐる。斯ふ云ふ有様だからたけのこは多量に發生するのであるが、孟宗畑の親竹の葉色が赤味を帯びたり、若くば枯色を呈したりして光澤が悪かつたり、葉の数が少いやうなもののは、所謂不良畑であつて、收穫量は至つて鮮ないものである。由來人間の強弱が略顔色に依つて、窺ひ知ることが出来るやうに、竹の葉は人間で云へば顔である、顔である竹の葉を見れば、其の孟宗畑の優劣は明かに判斷する事が出来るものである。

優良畑 則ち葉色の黒々した、たけのこの發生量が頗る多い孟宗畑は、實に肥料の賜といつても敢て過言ではなからう。だから孟宗畑栽培の要訣は、正に施肥量の多

量にありといひたい位である。それだけ重大な關係を持つてゐる、肥料の使用を惜むが如きは、それこそ一文惜みの百知らずではなからうか。お寺さんさへ布施ない經には袈裟をおとすといふから――。

試みに植付けた母竹に就て見るに、充分に肥料を施すと葉が黒々として垂れてくる未だたけのこは多く出ないとしても、其の鞭根を見ると、僅か一箇年の間に五尺も六尺も伸長してゐるものだが、施肥料の少ないものは獨り葉色が悪い許りでなく、其の鞭根の伸長も僅々二三尺位なものである。鞭根の能く伸びたことは、やがて將來に於てたけのこを能く生むといふ前兆だから――。

佛造つて靈を入れぬ

刻佛而不開眼と云ふことがある佛造つて靈を入れぬと云ふ諺と其の意味に於て變りがない。例へ何事をやつたにしても、大事な所に精神が注がれてゐないやうでは、

一向役に立たぬものである――。孟宗畑の經營にしても亦そうである、植付に母竹は能く活着した、立派に除草も行はれたとしても、其眼目たる營養分たり、發電の水力たり――燃料たる肥料を、十二分に供給せないやうでは、折角其骨格は出來上つたとしても、充分の收穫――十二分の利益は、到底收め得べきものでない。そう確信してゐる私は施肥の必要な所以を阿呆陀羅經によつて繰返して置かう。

竹林施肥の必要(阿呆陀羅經)

ヤレ／＼皆さんお聞きなされよ、佛陀如來の教に固まり、黄金なんぞは何するものかと、悟りひらいて慾氣を棄てて、俗を離れたお坊さんでも、抜かりないぞへ法事供養に、包むお布施が少ないものなら、拜むお經がてき面短かい、猫が肥へると鰹節が減るし、腹がへつては戦が出來ない、子實なんぞと口では云ふが、育て上ぐるにや大骨折でまこと、親御の脛が細るよ、孟宗畑でも違くないぞゑ、生へたタケノコ残した親竹、採つたり伐つたり取る事だけに、抜目ないのは中々偉いが、取つた



返禮忘れちやならない、忘れるやうな不徳野郎の、持つた畑なら、お経は短かい、鯉節減るし戦にや敗けると、同じ同道で地面は瘦るし、親竹衰弱筍生へない、この理窟を能く能く辨へ、取つたお金を丸取せないで、ウンとはり込み肥料を買ひ込み、畑にやること忘れちやならない、忘れちやいけないほんとに實際、ボク／＼ボク／＼

柿の木に牛を繋ぐと豊産

馬の爪を埋めこんで置くと、恰も壯者が——娘さんの方へ手を延ばすやうに、竹の鞭根が其處へ寄つて來ると云ひ傳へ、若くば竹の肥料としては、馬の爪に限ると迄云ふ人がある。吾人に對する山海の珍味のやうに——。馬の爪は云ふ迄もなく、孟宗畑の肥料としては決して不適當なものではない、しかし馬の爪が竹の肥料としては第一であり、これ以外のものは用ふるに足らないと、早合點するのは聊か早計と云ひたい

のである。

柿の木に牛を繋ぐと豊産であり、蜜柑の木に鶏が上ると豊産であるといふ所がある。——畢竟牛の排泄した糞尿が柿の肥料となり、鶏の排泄した糞が蜜柑の肥料になつて、左様に豊産の結果を來したものと、そう見るのが穩當であり——正當であつて、偶然の出來事などと見るのは、抑誤りではなからうか、柿蜜柑に効目のある牛糞——鶏糞、孟宗畑に施しても亦頗る結構である。京都附近で専ら施用してゐる人糞尿、決して悪からう筈がない。殊に都會附近で先方からくみ取料を呉れる人糞尿の如きは、獨り人助けの功德が伴ふ計りでなく、經濟上から見極めて、有利な肥料である。山間部などで好むで用ひられてゐる、大豆粕の如きは、成分の上から見ても施用に便利な點から考へても、亦極めて適當な肥料と云はねばならぬ。其の他米糠、魚肥、鳥糞、骨粉、油粕、蠶糞、灰、堆肥、厩肥、麥稈、蕎麥稈、粃殼、刈草、綠肥、落葉、塵芥、過燐石灰、硫酸アンモニア、智利硝石、石灰……等何でも構はない

なるべく自家で出来た肥料、若くは容易に得易いものを用ふるのがよい、値段の割合に効目の大きいものを。——だが鹽氣の強い肥料は施さぬ方が宜しい。

犬もあるけば棒にあたる

吾人が今食事をするにしても、御飯だけでは——よしそれが一等米であつたとしても、中々に咽喉の關門を通らない、どうしても御飯には何か菜のものがなければならぬ。漬物——お茶のあつい方が尙更よいことは云ふまでもなからう。——其の一つが缺けてゐてさへも満足に甘く胃に落ち付かない。假りに夫々揃つたとしても、御飯が堅ければ勢ひ茶を餘計に望み、菜が辛ければ分量は少くて済む、漬物にしても亦さうである。と云ふやうに孟宗畑の肥料も亦窒素肥料が何程必要だと云つても、これだけでは無論物足りたい。磷酸にしても加里にしても皆同じことである。それで肥料を施すと云ふ場合には、先づ其肥料の含むのである三要素の具合を調べて、甘くこれが配合

をやるのが大事である。配合の割合は前にも云つた所だから、茲に再び繰返すの必要もないが、念のために重量の割合を記して置かう。

▲窒素七 ▲磷酸六 ▲加里一〇 (外に反當り石灰五貫内外施用)

そうすると人糞尿には、窒素五七、磷酸一三、加里二七、と云ふ割合に三要素が含まれてゐるから、磷酸と加里の肥料を加へないと都合が悪い。大豆粕にすると窒素七、磷酸一〇、加里、一六と云ふ割合に含まれてゐるから、人糞尿と同様、過磷酸石灰と灰などを施して、磷酸と加里の不足分を補はねば適當でない。これだけの注意が拂はれてこそ、肥料の活用が出来るので、犬もあるけば棒に當る式の施肥法では駄目である。

肥料の配合に當つては餘程注意せないと、とんだ貴重成分を逃したり、きかないこととにすることがある。たとへば人糞尿に石灰を混ずるか、人糞尿から大切な窒素分を損失するやうに——。

寝て暮す呑氣時代

或人の調査によると竹の鞭根がのびる具合は、假に一年間に十尺のびたとすると、六七月の内に二尺、八九月の内に五尺、十月中に、三尺伸長したことになる。と、勿論此成績は一定不變のものではなからうが、略鞭根の生長状況を窺ふことが出来るであらう。これが生長に重大な關係を持つてゐるものは、云ふまでもなく氣温の高低であつて、氣温の上るに従つて其の活動を始め、愈々上昇するに伴つて伸長の度は盛大きくなつてゐる。即ち六月頃に活動を始めて、段々盛んになり、十一月頃になると既に休止するやうである。就中八月から十月一ぱい位の間が最も旺盛である。

三四月頃になると筍が出てくるのだから、秋期十一月頃から翌年五月頃までは、竹が全く寝て暮す呑氣時代といふ譯でもなからうが、一年中竹が最も能く活動し、成

長し従つて之れに要する食物を攝取するのは、何といつても四月頃から十月の末頃位なものであらう。それだから分解の早い所謂速効肥料は、此期間に施すのが理想的である。竹が早く吸取するから、養分の流失が少いから——。之れと反對に竹の休眠期即ち十一月頃から翌春三月頃迄の間には、遅効肥料即ち分解の遅い肥料を施すのが合理的である。然したけのこ發生の期間と其の直前は、往々にしてたけのこを傷つける虞があるから、其の時期は宜しくない。——で先づたけのこの生へ終つた頃に速効肥料を施し、それから八九月頃迄の間に此種の肥料を二回、それから三月頃迄の内に遅効肥料を施すと極めて妙である。たけのこの掘り穴に施肥するのは之れ又非常によい。

堅苦しいことを云つたが、竹の施肥は思ひついた時にやつて決して悪くはない。やらぬのが悪い。稲麥の施肥とは大分違つてゐるから——。

權兵衛が種子蒔きや鳥がほちくる

母竹植付當時の施肥法に就ては既に述べた通りである。其次の年には母竹を中心として、半徑四五尺位なまはりに、三つ四つの浅い穴を穿つて、其内に人糞尿であれば、水を等分位に交せたものを一杓位宛施し、それが地中に滲透した時分に土を覆ふのである。粕類にしても一度水に溶かしてから、此の要領で施用するのに越したことはない。——それが出来難い場合には、一つかみか二つかみ位宛穴の中に入れて、前と同様覆土する必要がある。植付後三四年目頃迄は漸次施肥地域を廣めてゆく、新竹が生へれば勿論其の外側まで——。言葉を代へて云へば、鞭根の伸長に伴つて施肥區域を擴大し、面積一坪に四つ位の小さな穴を掘つて、其の内に前の様に施肥すればよい。其の後は全面積に亘つて、施肥量の多寡により一坪に二から四つ位な穴を穿つて、それに施肥し——覆土せなければならぬ。

石灰や灰類の如きは土置作業前に、唯だ地上に撒布するだけで足りるが、人糞尿や粕類其の他の金肥は何と云つても穴肥でなければならぬ。——唯だ單に地上に撒布するだけの人がある。之れは作業が極めて簡單なやうであるが、それが雨水の爲に流失したり、又は發散したり、權兵衛が種子蒔きや鳥がほちくる、式を通り越して、鳥獸のために食はれたりする損失があるので、決して經濟的有利な施肥法と云ふことが出来ぬ。竹がこれを吸収攝取する上から云つても、亦頗る不便なものである。のみならず竹の鞭根は肥料分の方へ、方へと進展するのであるから、地表に肥料分を施すと、鞭根を地表近くへ誘致することになるので、此の點から見ても亦不得策と云はねばならぬ。

近視眼

蠶糞、堆肥、厩肥、米糠、魚肥、鳥糞、骨粉其他の金肥に對する施肥法は前述の通り

りで宜しいが、藁麥稈、蕎麥稈、粃殼、刈草、綠肥、落葉、塵芥等の如きものは、唯地上に撒布すれば充分である。が餘り厚過ぎると土壤が過濕に陥り、ために冷却するから、金を掛けて其の結果は寧ろ不良となるものである。

母竹植栽の當時は其近くに、漸次鞭根が伸長するに従つて、なるべく撒布面積を増大し、植付後五年目頃にもなれば、全面積に撒布した方がよい。

どんな肥料にしてもであるが、親竹の近くのみ施すものがある、他處に施しては効目がないと思つて——。植付後數年間は別問題として、此方法は——此考へは餘りに近視眼ではなからうか。論より證據、其他の所に鋤を打込んで見るがよい。すると養分を攝取する竹根が、必ずや其處に現はれるであらう。若し竹の根が萬一來て居なかつたとしても、其處に肥料を與へたことに依つて、竹の鞭根は喜んで此處へ集まつてくるものである。そして鞭根が土地一面にさへ蔓延すれば、それだけ多く筍が發生することになる。

商人が金を使つて廣告をする、そうして販路をどしどし擴張してやまぬ、販路さへ廣がればもう占めたものである。それから金は儲かる一方であるから——。此點を孟宗畑にも應用して、親竹のない所——筍の生へぬ所に、より以上に肥料を施して、そして鞭根の誘引を計ることが緊要である。丁度商人が廣告をして得意を殖やすやうに——。

11 敷草

林學士農學士

秋刈取つた藁などを孟宗竹林に積んで置く、そして翌年二三月頃になつて、之れを取除いて見ると珍らしくも其處にたけのこが頭を出してゐる。他には未だ發生してゐないのに——。時分が時分だから珍らしい、獨り珍らしいばかりではなくて、それが馬鹿に高價で取引せられるのが常である。其竹林のどこからもこゝからも、こんな

早く筭が出るものなら、どんなに多くの金が取れることであらう。とこんな場面を見せつけられた人々は、百人が百人ながらそう考へる事であらう。——事實だけのことを早く發生させることは、自然収入の多きくなる道であつて、確かに儲かりの大きいことである。斯様な偶然の出来事を甘く孟宗筭に當て箝めてやる仕事は、云ふ迄もなく熱心家によつて既に實施せられてゐる、敷草——敷藁といふのが則ち之れである。禿頭の林學士が御丁寧にも、のこる髪の毛で、一本列べに頭を包んでゐた、之を見たり一人があれば林學士だといへば、傍の一人は否な彼は農學士(腦隱士)だと主張して、互ひに論争し相譲らなかつたと云ふことである。林學士と云はふが——農學士と唱へやうが、そう大した問題ではない。農業も林業も廣い意味から云へば一つの農業だから——。其様に敷草、敷藁何れの名稱を用ひても、問題にするだけに重大な問題ではない。

刈草、藁其他いろんな物を地上に敷くと、何故にたけのこの發生が早いのであらう

か、それはこれ等の地被物によつて、土地が暖められ従つて、鞭芽則ち筭の生長が早まるのではなからうか、判り易く云へば丁度人間が綿入着物を着て、暖かいから仕事が出来来るやうに——。

うちの孟宗畑かせひかぬよに、  
着せてやりましよ藁布團。

姑嫁ふる嫁下女をふる

光線を避けて溫度——濕氣を興へ、そして蔬菜を栽培することがある。土當歸などに此の方法がやつてあるのを見るであらう。藁や糶殻などを被ふて——。そうすると青莖になるものが白莖になり、其質は極めて柔軟になり、其の品質が優良になることは、こゝに多く云ふ迄の必要もなからう。光線に當ることの少い、床の下又は木蔭などに生へて居る雜草を見ると、何れも弱々しそに見へる計りでなくて、青味が少く

極めて柔かいものである、やうに——。

此蔬菜の様に——雑草の様に、色澤が白くて其質が柔かである筈は、蓋し筈の中の逸品であつて、優等品であり世人の齊しく渴望して止まぬ所のものである。斯う云ふたけのこを作り出すのには、敷草をして温度を興へ、濕氣をたもたせ、光線を遮らせてやるより外に方法がない、土當歸の場合と同様一種の軟化法であるから——。

でないとなけのこは光線を受けて其の皮は光澤のある黒色を帯び其肉は硬く劣等であつて、別嬪振りが悪いから惚手が少いやうに望み手が少い。

適当な温度と濕氣とを土壤に興へることは、獨りたけのこの品質を向上させるばかりではなく、地中にある鞭根の伸長に著しく好影響を興へるものである。——姑嫁ふる、嫁下女をふる、下女はつるべの繩をふる、と云ふ俗歌があるが、敷草をするとよいたけのこが生へる、鞭根の成長がよい、土地の改良が出来る、……と云ふやうに其影響する所は中々に大きいものである。

### 天女が交つたやうに

敷草の効能は獨りたけのこの發生を早め、生へたたけのこの品質を向上させると云ふばかりではなく、恰も吾々の住宅を改良するやうに、竹の住屋である土壤を改良する働きがあるものである。——其處が若し強粘土であつたとしたら、敷草によつて逐次土壤が膨軟になる、例へば堅くるしい男の中へ美しい天女が交つたやうに——。土壤が膨軟になれば、勢ひ溫熱や空氣が此間の侵入し易くなるから、肥料の分解が早く竹の鞭根の生長がよくなる。それと土壤が膨軟でさへあれば、たけのこの掘り取が至極楽な功德が伴ふものである。反對に其土壤が膨軟に過ぎた所では、敷草によつて噸に保水力が強くなり、従つて鞭根の生長が宜しい。之等の働きは所謂ハイカラ先生方の云ふ、土壤の理學的效果とでも唱へる所であらう。

更に六箇敷く敷草の化學的效果とでもいふ言葉を借つて云へば、夫々敷草に使つた

材料の内には、竹の生育に一日も缺くことの出来ない、極めて大切な成分が含まれてゐる。此成分を竹に供給すると云ふことになるので、云はゞ敷草は一つの施肥に外ならないものを此處に、殊更に敷草として一項を掲げて、施肥の部から取り外して先輩が論じ、業者が斯く高唱する所以のものは、則ち前に述べたやうに、肥料として論ずるのには、餘りに其副作用が多過ぎたからであらう。それは當然畜産の繩張り内にあるべき養蠶が、其繩の外に飛び出して獨立し、養鶏が又其柵外に逃げんとしてゐると同じやうに——。と云つて妻君の肩書をつけ得ない、妾さんや、手掛さんと同一視せよと云ふ譯ではない。肥料から分家した敷草は——。

天寶錢の寢言

藥の効能書にも劣らない程に、効能の多い敷草は、それが若しも單に肥料と云ふ目的であれば、年中何時やつても差支ないのであるが、孟宗畑の敷草として、そして

最も有効に活用させるためには、娘に適當な婚期があり、官吏に勇退の適期がある、喧嘩に仲裁の潮時があるやうに、必ずや之れにも亦適當な時期があるものである。適當な時期とは一葉落ちて天下の秋を知る、と丁度其時則ち九月から十一月頃迄の間であらう。そろそろ冷氣を催し——段々冷氣を加へる候であるから——。十二月でも翌年一月でも、やらぬよりやつた方がよいのは云ふ迄もない。

敷草の材料としては、山草と云つて山に生へてゐる小柴——雜草等の刈取つたものは最もよい、容易にこんな材料が得られないならば、藁、麥稈、粃殼等決して悪くはない、若し堆肥、厩肥などが得られるならば、之れに越したものはない、都市附近で市街に出來た塵芥があるならば、其内から木片、石礫、陶器、硝子などの破片を取去つて、これを用ふるのには養分も多く、値段も割合に安價に得られるものだから、これを利用することは經濟上頗る有利なことである。都會附近で塵芥を用ふるやうに、養蠶地では蠶の食ひ残した桑莖若くは糞などのまじつたもの、又は上簇に用ひた藁など



を用ひ、稲作の盛んな所では専ら不良な藁、腐り藁、水つき藁、虫害藁若くは粗穀を用ひ、其他畑作の多い所では麥稈、蕎麥稈、粟稈其他穀類の稿稈類を用ふるのが、最も賢明な方法と云はざるを得ない。

麥稈を用ふるとよくない、蕎麥稈を使ふと竹が枯る、煤藁を入れると竹が傷むなど云ふ人がある。實驗して見るに決してそんなことはない、使用せないのこそ悪いので斯う云ふ文句こそ確かに天寶人間の寢言ではなからうか。

竹にして見りや、

甘い話しを妾しや聞くよりも、入れて下さい刈草を。

と一句を駄句るかも知れぬ。

### 三度炊く飯さへ堅し柔かし

肥た人よりも却つて瘦た人の方が能く食ふものである。諺にも瘦せ男の大飯とあ

るやうに——。それは例外として、五歳以下大人の四分の一、十二歳以下大人の二分の一などと使用量が賣藥などにはちやんと記されてゐるものだ。之から思ひついたと云ふ譯ではないが、敷草の使用量も孟宗畑が一人前になる迄は、年々其量を増して行くのが順序である。則ち植付た時は唯其母竹の株元にのみ撒布し、其の次ぎの歳には稍廣い面積に、段々と廣い面積に敷き均らし得るやうに、其の量を殖やして行き、植付後六七年目頃からは全面積に敷き渡らすやうにするがよい。

鞭根の蔓延するに従つて、漸次敷草の面積を廣がらして行くのは、眞に理想的には相違ないが、能く云ふ通りに、三度たく飯さへ堅し軟かすと、中々思ふやうには行き悪いものだから、簡便法としては、植付後五年目頃迄は敷草をせない、するとしても母竹の周圍位に止める、——だから土置などは勿論やらない。未だ鞭根も錯雜してゐないし、筍もそう澤山に發生せないから——。と云ふ方法を探つて、其の代りに肥料をうんと施すのも、亦一つの方法ではなからうか。植付後六年目頃から始めて、全

面積に敷草をやることにする。敷草の分量は無論多いのが結構には違いないが、さりとて餘り多過ぎると、薬が却つて毒となり、滋養分だからとて、無理に大食すると胃を害ふやうに、過ぎたるは尙及ばざるが如しとか、却つて土壤に濕氣を持たせ過ぎ、温熱の侵入を妨げて地温を低下し、ために鞭根の發育を妨げ、發筍の期を遅らせて思はぬ損失を招くことがあるものである。

### 運用の才

先づ敷かうとする材料を孟宗畑の内へ擔ひ込み、點々あちこちにをろし、そうしてそれが藁、刈草其の他の稿稈類であれば、株元の方を周圍に向け、順次それを敷き込むので、其の厚さは一二寸位でよからう。

厚さ一寸位に敷め詰めるものとしても、其の目方は材料の種類によつても、又はそれが乾燥してゐるか、若くは乾燥不充分であるかによつても、無論異なるのが當り前で

ある。——で重量では的確に云ひ現はし難いものではあるが、先づ面積一反歩に對する藁、麥稈、刈草等の概數を云つて見ると、全面に敷き詰めるものとして、ざつと八百貫目内外のものであらう。此の筆法から孟宗畑の一反歩に對する敷草の量を示すと次ぎの如くである。

植付後一年目百貫目内外、植付後二年目二百貫目内外、植付後三年目三百貫目内外  
植付後四年目四百貫目内外、植付後五年目六百貫目内外、植付後六年目八百貫目内外  
植付後七年目以降は六年目に同じ分量でよい。と斯う大體の概數だけは擧げて見たが、前にも充分に斷つて置いた如くに、決してこれは完全無缺の表ではない。——唯だ概數である。標準であるから實際に當つては、甘く臨機應變の運用の才がなければならぬ。表などはほんの死物に外ならない、いきた人間の運用によつて、始めて其處に美しい花が咲き、立派な實を結ぶものである。咀嚼して食はぬと丸呑込は、胃腸を害ふと云ふことを附記して置かう。

## 都會から別莊へ

學者が専門的に段々と深入するのと反對に、竹の鞭根は淺く——廣く水平的に、蔓延する性質をもつてゐる。勿論水平的にと云つても、細かに云へば波狀に伸長してゐるのである。そして夫れが年功によつて官員さんが鰻上りの藝當を演ずるやうに、一年一年と漸次上の方へ上つて來るものである。甚だしいものになると地表へ現出することがある。——孟宗竹の鞭根は竹の中では、割合に深く入る種類ではあるが、それでもそう深いものではなく、遠慮なく地表へ顔を突き出すもので、そこが樹木などと較べて全く異なる所である。

筍や伸上りては親を見る

と、俳句のやうに出て來る子供が親よりも太く、高く伸びると云ふなら、若い人間

が名實兼備古い人間の上に出ると云ふのなら、これ程結構なことは無いのであるが、遺憾ながら孟宗竹の鞭根が上へ、上へと出てくることは、甚だ以てあり難迷惑な恨事である。

鞭根が地表へ年と共に集合するのは、抑々其の原因は何であらうか、兎も角も、其處に何かの原因がなければならぬ。——目の廻る様な競争、びりくと尖つた神經、それこそ都會の特産で——都會人の特有である。斯んな人間が休養の意味で別莊生活に入つたやうなものだとも、若くは色は黒うなる百姓を棄て、町へ出て行く娘さんとも考へられないことはない。休みなく水平的に伸び續けてゐる鞭根は、丁度網の目のやうに前後左右から上になり下になり、所謂錯雜して來る。それで地震の時には竹林の内が安全であると、昔から云ひ傳へられてゐる。此錯雜状態から免れて、新天地——別天地則ち地表近くに伸びて來るのである。都會から別莊に入るやうに——。それは鞭根の錯雜世界であつて、食いものゝない所から、甘い食物を目掛けて地表々々

へと鞭根が出来てくるものである。

身を泰山の安きに置く

基礎工事が堅固でなければ、其上に建てられた建物は決して安全ではない。大きな木は倒れないために、根を地中深く——廣くに張つてゐるではないか。こう云ふ事情を孟宗竹にしても、萬更知らないといふ筈はなからう。事實に徴すに、身を泰山の安きに置く積りから、浅い鞭根からは太いたけのこが生へない、殊に地表を走る鞭根からはさながら、笹の様なものしか出ない、子孫の繁榮を希ふ竹では、浅い鞭根から太い竹を生やすと、基礎が極めて不安全であるから、風や雪や其の他色々の關係から根倒れをする事がある。そうなると、子孫の繁榮上頗る不親切であり、時としては子孫の滅亡を來す患があるので、斯くは遠慮して、小さな子孫をのみを産み落とした譯である。その證據には、必ずや太い竹は基礎安全なりとする、相當に深い鞭根から

生へてゐるのではないか。

斯う觀察してくると、鞭根の年々地表近くへ蔓延してゐることは、竹自身のこととは問題外とするとしても、栽培者の立場から見ても、誠に吊すべきの極はみである。たけのこの生産量の上からも、はた品質の上から見ても——。こんな事實を見せつけられて居りながら、尙且つ手を束ねて傍觀して居つて宜いだらうか。それが果して智慧のある人間の採るべき道だらうか。否々そうではなからう、竹を愛する方面から見ても、當業者自分がより以上の利益を収めやうとする點から考へても——。そこに何か適當の方法を講ずべき必要があるのである。

色が白けりや七難隠す

色が黒けりや達者で可愛い、白けりや弱そうでは可愛い、と都々逸文句にある通りに、色の白い方がなほ異性から可愛がられるのが常である。人間と筍とを混同し

たと云ふ譯ではないが、皮の黒いたけのこよりも——白いたけのこの方が、一般から歓迎せられることだけは事實である。と云ふのはたけのこが生長して地上に出て來ると、皮の色は黒くなつて來る。黒くなつて來ると丈夫ではあるが、其の組織が硬くなつて來るから、之れを吾人の食料と云ふ點から見ると、其の質が硬いだけ——纖維が發達して來ただけ、それだけたけのこの品質が不良であつて、萬人むきのものではないと云ふ事だけは保險付である。試みにこんな筍の根部に庖丁を當て、見ると恰も木のやうに堅くて中々刃が通らない、辛うじて調理は出來たとしても、堅い纖維が口の中に残つて、容易に咽喉を通り越さない。殊に老人に對しては猫に小判も同様である、見て居るだけで食へなからう——。

色が白けりや七難隠すと、皮の色が白い筍は、獨り見掛けが好い、七難を隠すと云ふ計りではなく其質が柔かであり、其の味が宜しいから従つて品質が優良である。こんなたけのこは地上に出てゐるものでなくて、必ずや土中にある時代のたけのこで

ある。殊に大都市では、こんなたけのこでなくては人が相手にせない、すると世人の歓迎する、そうして値段の高く賣れる、金のより多く儲かるたけのこは、土中から頭を突き出した時分のもので、たけのこの皮は白色に近いものである。そうして見ると鞭根の浅いものからは餘りに小さ過ぎるものしか生へない、地上に出てから採收するのでないから——。そこで當然起つてこねばならぬ問題は鞭根を適宜の深さに置くこととでなければならぬ。

棚 おろし

常に孟宗竹の鞭根を適當な深さに位置させて、よし地中にある時代に採收しても、尙且つ適當の大きさであるたけのこを作り出すためには、自然に放任——から一步をすゝめて、人爲によつて或る操作を行はねばならない。京都市たけのこ栽培法、目黒式たけのこ栽培法、中耕式たけのこ栽培法と云ふのが則ち之である。

現今廣く各地で行はれてゐる京都式、筍栽培法と云ふのは、一口に云へば上から上からと土を覆ふ栽培法であり。目黒式、筍栽培法と云ふのは、鞭根を地中に埋め直す方法であり、中耕式だけのご栽培法と云ふのは、所謂福岡縣八女郡地方で専ら行はれてゐる方法であつて、傾斜が急なために、無論京都式の栽培法も出来ない、と云つて土壤の關係から目黒式の方法も全然不可能であるがために、中耕をやつて鞭根の上昇を許さない方法である。

鞭根を或る深さにおく方法から分類して見ると、大略以上の如く三つにわけることが出来るであらう。そこで此三方法に就て極めて公平な立場から、之等の棚卸しを試みて、讀者諸君の参考に供して見たい。目黒式栽培法は極めて理想的ではあるが、あの目黒附近のやうな膨軟な土壤、例へば火山灰の如き俗に云ふ、クロブクと云ふ塩土に於いてのみ適當ではあるが、其他の土壤に於いては作業が困難な爲めに不得策である。京都式栽培法は理想から云へば前者に劣るかも知れないが、どんな土壤にも應用

することが出来る得點がある。今日到る所に此方法が行はれてゐるのは、とりも直さず此證據ではなからうか。中耕をして地表近くの鞭根を傷付けるのは、先づ感心の出來難い所ではあるが、地勢の關係上放任するよりも、其成績が遙に優良な所から見ると、急斜地栽培法として中耕式も萬更棄てる譯にはゆかぬ。

骨折損のくたぶれ儲け

鞭根の錯雜を緩和して之れに新天地を與へ、尙地表に近づく鞭根を埋め、傍落葉や敷草の腐朽を速にし、施した肥料分の逸散を防ぐのは京都式だけのご栽培法で云へば、當然土置作業の効用にきせしめなければならぬ。孟宗畑に土を入れる作業は、竹林の土入作業と區別するために、之れを土置と唱へるのであつて、京都附近などでは専らそう云つてゐる。書物などにも斯う云ふ文字が用ひられてゐるやうである。――と云つて、そんな名稱は何れを使用するとしても、敢て問題とすべき程の問題では

なからう。

土置の時期は敷草の仕事が済んでから行へばよいので、遅くも翌年の二月頃迄には完了すべき必要がある。何れかと云へば十一月中位に終るのがよい。先づ農閑の時期を見計つて、平坦地では或る一方から、波状地では其の凸部から傾斜地では適宜上部から土を掘取つて、之れを擔ひ込んで敷草の上に引きならすのである。其の量は敷草が見へるか——見えぬか位の程度で充分なので、一坪——壘二枚敷に十六貫荷三荷面積一反歩に八九百荷則ち四立坪位な土量でよからう。すると之に要する人夫は約十二三人位なものであらう。

植付後一人前の孟宗畑になる迄は、唯だ敷草のしてある部分にのみ土置をすれば足りるので、反當り四立坪——八九百荷の土量が必要とするのは、無論一人前の畑則ち植付後七八年目になつてからの話である。連年行ふべき土置の量は、少過ぎるのは無論よくないが、と云つて多過ぎるのは、發筍の時期を遅らせて損である。骨折損の

くたぶれ儲けとは此事であらう。努力は餘計に掛つて、其結果は不利益だから——。

13 根埋

落つれば同じ谷川の水

小學校の先生の免状は、師範學校の本科を卒へても、又は其二部を出ても、若くは検定試験を受ても採れるものである。斯様に其の歩むできた道は違つてゐたにしても同じく先生の免状は採れるやうに、落れば同じ谷川の水のやうに、京都市筍栽培法が年々敷草をし、尙その上に土置きをやつて鞭根を埋めるやうに、目黒式だけの栽培法では敷草——土置を實行せないが、年々地表へ表はれてくる鞭根を埋め直して、之れを適當な深さに位置させるものである。東京目黒式だけの栽培法の骨子と云ふべき、第一回の根埋は七月の上旬頃から下旬頃迄の内であつて、地表に現はれてきた鞭根の中から、最も優良なもの約一割をのみ埋めて、他のものは切り棄てるのであ

る。——爾後十五日間位を經過した時分に、前に埋めたもの全部と、初めて地表に現出したもの、内、良好なものを埋めて、他は切り棄てるのであるが、此時期には比較的良いものが多い、第三回目の根埋は第二回終了後約二十日内外を經過して行ふのであるが、此時は概ね下層から出た鞭根であつて、良好なものは極めて少い。此時に埋める鞭根は此内の良好なものと、前に埋めた鞭根の現出してものである。稀には第三回根埋終了後三十日内外に、第四回目の根埋をやるものもあるが、普通は以上の三回に行ふ者が多い、埋めてやるだけに必要が少いから——。

年々二回乃至四回の根埋をやるものだが、其何れによるにせよ最後の根埋の際には鞭根の伸長を阻止するために、其先端四五寸を切斷することを忘れてはならぬ。

尊い寺は門から知れる

萬物の靈長である人間にさへ、優良の種族を繁榮させるために、之に對して種々な

研究さへ進んで来た時代に、目黒式栽培法の根埋に當つて、其の良否優劣を判別撰擇することは、敢て珍とするに足らぬであらう。よきだけのことを産ませるために——。

尊い寺は門から知れると、嘗て阿部東京府技師の調べられた所を拜借して、埋め込む鞭根と——切斷する鞭根との識別に便じやう。

根埋する鞭根 (優良なもの)

- 一、活氣に富んで尖端が帶紫白色、若くは帶桃白色を帯びたもの。
  - 二、太さ中庸にして、稍や隋圓形に發達し、節間比較的短かく、多少屈曲せるもの。
  - 三、鞭芽(鞭根の節にある芽)の肥大せるもの。
  - 四、鬚根の發生多きもの。
  - 五、異状なきもの。
- 切斷すべき鞭根 (劣等又は不用なもの)
- 一、餘り早期又は晩秋に地素に現はれたもの。



- 二、良好の鞭根なるも甚だ淺きか、又は深き所より發生せるもの。
- 三、鞭根細く、節間長く、節高く一見發育不良なもの。
- 四、節間肥大に過ぎ圓く發達せるもの。
- 五、尖端灰色、黒色或は青色を帯ぶるもの。
- 六、色澤良好なるも、其の尖端鋭細にして、堅過ぐるもの。
- 七、枯死又は腐朽せるもの。
- 八、優良なる鞭根なるも、數餘り多過ぐる場合、其内の不用なるもの。
- 九、直立して進行せるもの。
- 一〇、先端倭小なる竹となれるもの。
- 一一、老齡なる鞭根より發生せるもの。
- 一二、基部より地上に向ふこと急なるもの。

椽の下の筍

根埋——それは鞭根の尖端が地表に現出した時、之れに沿ふて深さ幅共に一尺五寸内外の溝を掘り、不良又は不用なものは基部から切斷する。やくだな代物を遠慮なく篩落すやうに——。優良にして必要な鞭根をのみ、其の鞭芽が鞭根の兩側に位置して上面を下方に向けぬやうに溝の中央に据へ、最初之れが基部から兩足で軽く踏みながら、鞭根に土を覆ふのである。其の深さを五寸内外として、四五日間其の儘に放任してから、米糠、人糞尿などを施し、其の上に落葉、刈草などを詰め、尙土を置き更に藁又は麥稈を其の上に覆ふのである。此場合鞭根の尖端を少しく下方に向け、尙其の點を地上に木片などで標示して置くと、次ぎの根埋に大層便利なものである。

鞭根の長さが三尺内外の時分に根埋をやるのが作業上便利だから、勉めて此程度に伸長した頃に行ふのがよろしい。一年間には一丈も一丈四尺も伸長するものである

から、前に云つたやうに、年に三回内外も此仕事を繰返さねばならぬことになる。埋め込む深さは餘り深過ぎると、鞭根の生長から云つても好くないのは勿論、筍の出る時期が遅れるから不得策である。それだと云つて淺過ぎると、良筍を多量に得ることが出来ぬ缺點がある。世に出ることの出来ないことを、俗に縁の下の筍と云つてゐるが、今云つた位な深さでさへあれば、何の苦もなく樂々と地表に出て來るものである。出て來ただけのこは地表に其の穂先が現はれた時分に掘取つてさへ、普通一本の目方が一貫目内外はある。稀には二貫目にも達するものが出る。

14 中 耕

窮すれば自ら通す

土地の傾斜が急峻であるために、効果顯著な土置の作業も施すに術もなく、さねはとて土壤が膨軟でない山地では、目黒式の根埋めも極めて困難である。そうかと云つ

て、舊來の儘に棄て、顧みないならば、鞭根は遠慮笑釋もなく地表に現はれて來る、そうなれば良い筍を澤山に收穫することは出来ない。こゝに頭を悩ました結果、窮すれば自ら通すと、其處で考へ出されたのが、所謂中耕式孟宗筍栽培法であつて現に福岡縣八女郡白木村及邊春村などでは、盛に此方法によつて栽培してゐる。

此方法は普通筍の收穫を終へた五月の下旬か、若くは七月の月上旬に第一回の中耕を行ひ、九月の下旬に第二回の中耕を行ふものである。中耕とは深さ二三寸に耕耘することであつて、實際上層の鞭根は悉く切斷せられるものである。だから鞭根は地表近くには一本も通つてゐない、其結果は丁度土置をして鞭根の位置を深めたやうであり、根埋を行つて鞭根を深めたやうなものである。上層に頭を出す切られるから、深くへ這入る安全地帯へと――。萬更鞭根が斯う自覺した結果と云ふ譯でもなからうが、年々歳々中耕を繰り返してくると、土壤は柔かになつてくるから、此作業は思つたやうに困難ではない。それで反當り一回に人夫の四五人もかゝれば充分に出來

るものである。此方法は除草ともなり、中耕の前に三四玉の大豆粕を撒布して、之れを土壤中に打込むと、又施肥の作業も兼ね行ふものであつて、傾斜急峻な所に於ける筍栽培法としては、極めて都合のよい方法であると云はねばならぬ。

此方法は急斜地の筍栽培法としては、私は双手を舉げて賛辭を呈する者ではあるが、平坦地——緩斜地の栽培法としては、遺憾ながら賞揚する丈の勇氣が無い。

15 親竹

筍を客に掘らせて亭主ぶり

親竹、これは植付に用ふる苗竹の意味ではない。——で母竹とは全然異なつたものである。此處に云ふ親竹とは、母竹又は根株を植付てから、又は鞭根を誘引してから生へた筍の内から、將來筍を生ませる親として、孟宗畑の中に残す竹を云ふのである。其任務が筍の繁殖にある以上、親竹としては之れに最も適合したものでな

ればならぬ。

掘残しの筍——掘遅れの筍を立て、親竹にするのは、餘りに無關心な人の行爲ではなからうか。善良な筍は悉く賣拂つて、不良なもののみを親竹に立てるのは一見大慾あるの士に見えて、實は極めて無慾な人と云はざるを得ぬ。筍の高價な年には親竹として残す筍の數を少くし、筍の値段が安い歳には、多くの筍を存置して親竹とするが如きは、亦賢名な當業者のやり口だとはどうしても受取れない。——筍や客に掘らせて亭主ぶりと、之れは有名蓼太の俳句である。此俳句化せられた面白味とは、稍や其趣きが異なるのであるが、筍を他人に掘らせて、そして親竹を其人に勝手に立てさせる事は、多くの場合好結果を來すとは思はれない。我がものと思へば輕し傘の雪と云ふ具合に、親切に——合理的に親竹とする筍を残して呉れることが稀だから——。よし親切な人であり忠實な商人だつたとしても、其土地の状態——孟宗畑の現況、さては其目的とする所によつて、親竹とする筍の選定並本數

を決定せねばならぬのであるが、如何せば、其事情に最も精通してゐる人は、實に其經營者であつて他人ではない。して見ると、親竹の立て方は經營者が最も上手なりと云ふ結論が生れるので、他人は決して此右に出で能はぬであらう。どうしても親竹の立て具合、置き方は當然經營者のやらねばならぬ仕事である。伐竹を自分自身がやるのに越したことが無いやうに――。

一 得 一 失

惣領の甚六とか、兎角惣領には馬鹿が多いやうに、昔からちやんと相場が定まつてゐる様だが、眞にそんなものか知らむ、お門違いではあるが、孟宗たけのこときではそれが甘く當てはまらないやうである。早く出たたけのこを見ると、その形こそ委小であるが、鶏の初卵と好一對に――恰も小男の智慧が早廻りする様に、決してその行動が遅鈍ではなくて鋭敏である、鋭敏の行動それは保険の限りでないとしても、身

體の丈夫なことだけは確實である。

たけのこの發生する状況を見ると、早生たけのこ則ち早くはへるたけのこは、地表に近く蔓延してゐる鞭根から生へたものであり。中生たけのこ則ち早生に次いで出たたけのこは、早生の生へた下方の鞭根から出たものであり。最も深い所にある鞭根から出たたけのこが則ち晩生たけのこと言つて一番遅く生れたたけのこである。一方たけのこを生む鞭根の状況を見ると、年を重ねるに従つて、段々上へ上へと上つて来るものである。だから一口に言へば下層にある鞭根は古く、上層にある鞭根は新しいと言ふことが出来る。此點から推察して見ると、早生たけのこは新鞭根から生へたものだと言ふことが出来る。して見ると、早生たけのこ人間で言へば惣領殿は、勢力旺盛な新しい鞭根から出たたけのこが多いといふことが出来るので、親竹として残すたけのこととしては、實に理想的の鞭根から生へたものと云へやう。何となれば、たけのこをよく生む元氣な鞭根であり、地表近くを通つてゐる鞭根なるが故に早くたけ